

転生失敗！八神家の日常

ハギシリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その日、俺は子猫をかばいトラックに轢かれた。もう駄目かと諦めかけた時、天から神の声が――！

届くはずもなく、普通に全身打撲でしたはい。仕方ないんでイケメン銀髪オツドアイのオリ主は諦めて、姉のはやと慎ましく生きていきます

目次

トラックに轢かれたけど転生できなかった	1	
類は友を呼ぶつてある意味詰みだよね	13	
授業参観？	いいえ、授業崩壊参観です	25
八神楓の一日は大体こんな感じ	37	
家に帰りたい……↓家にも帰りたいくない	49	
……		
バキボキ！八神家の楽しい家族旅行！	61	
そのいち		
バキボキ！八神家の楽しい家族旅行！	61	
そのにつ	75	
バキボキ！八神家の楽しい家族旅行！		
ふあいなるつ	89	
チャリできた。補助輪付きだけど	104	
別に魔法ぶつ放さなくても、友達にはなれる	118	
それは珍妙な出会いなの	131	
宿題は自分でやりましょう	143	
映画は友達と見るようにしましょう	150	

トラックに轢かれたけど転生できなかつた

——トラックに轢かれた。

そう頭で理解するのに、一体どれくらいの間がかかっただろうか。

学校の帰りにちよつとG E Oに寄つてアベンジャーズ借りて帰ろうとウキウキしていた俺がふと前を見ると、なんと信号無視で、突っ込んできたトラックに子猫が轢かれそうになっているではないか。

普通の人なら見捨てるか、これから起こるであろう惨劇に目を覆っていたことだろう。だが、俺は：俺達は違う。愛しのキャップならきつと子猫を助けるはずだ。

足に力を込めて前方へ駆け出す。身体能力は良い方ではないが、やるしかない。伸ばされる手。

華麗に避けるネコ。

一人吹っ飛ばされる俺。

まっすぐ家に帰らず寄り道をしたバチでも当たったのだろうか。こうして俺は子猫を救った英雄から、奇声をあげてトラックに突っ込んで行った変態へとジョブチェンジ

を果たしたのだった。

ぼんやりとした意識の中で、これまでの人生の記憶がスローで流れていく。へえ、走馬灯ってこんな感じなんだ……。

小さい頃に他界した両親との少ない思い出、家族とバカな話で笑いあった記憶。そのどれもが思い浮かんでは泡のように消えていった。

待つてくれよ、それは大事な物なんだ。

必死に手を伸ばそうとしても、届かない。

最後に浮かんだのは姉さんの顔だった。

厳しくて口うるさいけど、その何百倍も優しい俺の自慢の姉。

姉さんは悲しそうな顔でこつちをじつと見ていた。

ああ、悲しまないで、姉さん。

生まれ変わったら俺、銀髪オッドアイのイケメンのチート能力持ちにしてもらうんだ。やべつ、新しい名前も考えとこ。なんか米国風のかっこいいの。

おーい、神様ー？

そろそろなんかやたらフランクな口調で現れるんじゃないのー？

あつ、なんか天から白い光が降ってきた！これ死なない感じのやつだ！

やつたー神様だあ！ねえ、俺が死んだのは手違いなんてしょ？

あつ、違うあれ天使だ。完全にお迎えだわこれ。

「全治2週間ですね」

「…はい、先生」

事故つた翌日、なんとか天使を振り払って現世に蘇つた俺を待っていたのは病院の無機質なベッドの感触と、主治医の石田先生の冷たい宣告だった。

先生はカルテを手に持ちながら、俺の今の状態についてあれこれと聞いてきた。当然、一番聞かれたくない事も…。

「それで、どうしてこんな事になったの？」

「……キャプテン・アメリカになりたかったんです…」

「……はあ」

先生、患者の前で露骨に溜め息をつくのはやめてください。

「私がわざわざ言わなくても分かっているとと思うけど、お姉さんのこともあるのよ？ やんちゃするなどまでは言わないけど、無茶なことをするのはやめなさい」

「はい、ごめんなさい……」

「もういいわ。それよりもお友達が来ていますよ」

「お友達？」

体を起こそうとすると、脇腹の辺りに激痛が走る。

やばい、これめっちゃ痛い。

というか、友達って誰だ？

「こんにちはー」

「お邪魔します。楓くん、お見舞いに来たよ」

お友達の正体は同じクラスのアリサ・バニングスさんと月村すずかさんだった。

正直、クラスで何度か話したことがあるくらいで、そこまで親しいわけじゃなかったから、2人が来てくれた事は意外だった。

普段は高町さんとよく一緒に行動してる2人だけど…どうやら今日はいないみたいだ。

「アンタ事故つたんだって？ ホームルームで聞いてびっくりしたわよ。よく生きてたわね」

「ああ、うん…」

…ホームルームで言われたのか、俺のこと。

多分、初めて俺がクラスの話題の中心になつたんだらうけど、多分自分からトラックに突っ込んだアホだとか言われてんだらうなあ…。ああ、なんか目頭が熱くなつてき

た。

「…やっぱり神様なんていなかったね」

「ちよつと、あんた大丈夫？ 頭打った？」

気にしないで、バニングスさん。ちよつと世界の残酷さに気付いただけだから。あと、神様はいなかったけど天使ならいたよ。

「やっぱりまだ体は痛むの？」

「まあ、一応トラックに轢かれたわけだからね。でも、なんてゆーか…ちよつと感動したかも。バニングスさん達って、すごく優しい人だったんだね。わざわざ、お見舞いに来てくれるなんてさ…」

「ん？ ああ、ちよつと怪我したフェレット拾ってね。ついで？」

「ついで!? 俺、フェレットのついで!？」

「ちよつとアリサちゃん！」

今明かされる衝撃の真実！ 俺、フェレット以下!!

なにこれ？ いじめ？ 優しさを装った新手のいじめですか？

というか、その「あつ、やべつ」みたいな顔やめる。

「もう帰れよ、あんたら…」

「アンタなにカッカしてんのよ？」

「これだからコミュ障は…。何でキレるか分かったもんじやないわね」

「き、きつと入院しててお友達に会えなかったらからちよつと機嫌が悪いんだよね？」

「ははっ、やあねえすずか。だったらこいつは年中機嫌が悪いことになるじやない」

「帰れエツ!!」

というか、今まで俺をどんな目で見てたんだよバニングスさん。

「でも、実際あんた友達いないじやない？ クラスで誰かに話しかけられたことある？」

——っ！

「…はは、やだなあバニングスさん。」

確かにクラスじゃ目立たない方だけど、俺だって友達の一人や二人…」

「例えば？」

「……虎吉とか」

「それって近所の野良猫でしょ？」

「こういう猫と壁しか友達のいない人間にはなりたくないわねえ」

「ねえ、もしかして俺嫌われてんの!?!」

あと壁を友達にした覚えはねえよ。時々話し相手になってもらうだけで。あれ？

なんか死にたくなってきた。

「そ、そんなことないよアリサちゃん！」

わっ、私は楓くんのこと友達だと思ってるよ！」

そうだそうだ月村さん、もつと言つてやれ。そして俺をこのイエローデビルから救つておくれ。というか俺これからクラスでどんな顔してバニングスさんと過ごせばいいんだよ。無理だろ、もうなんか怖いわこの人。

「あら、もうこんな時間。

すずか、そろそろ戻らないと習い事のバイオリンに遅れちゃうわ」

「あ、ほんと…。あの…今日は邪魔しちゃつてごめんね。…また、来ても良いかな？」

「…まあ、俺が暇なときならね」

「つまりいつでもOKだそうよ」

そうは言つてねえよ。もう嫌だこの人…

「じゃあまたね、バイバイ。」

…ああ、アンタにとっては未知の領域だろうけど、日本人は別れる時にこういう挨拶をするのよ」

「俺だつてするよ!?!」

こうして嵐のような女は悪魔の微笑を浮かべながら去つていった。何であいつに友達がいて俺にはいないんだよチクシヨウ。もう退院しても学校行きたくねーよ。

次にお見舞いに来てくれたのは近所に住むオバハンだった。所謂カミナリババアと

は違い、この人は普段から何かと気にかけてくれる人の良いババアだ。時々夕食なんかもウチに持ってきてくれる非常に頼れるババアだ。

「それにしても楓ちゃんも運が良かったわね。打ち所が偶然よかったおかげで助かったんですってね」

「そうですねえ。本当に運が良ければそもそも轢かれない気がしますけどね」

いや、まあ9割方自分の責任なんですけどね。

「そういえばお姉さんはまだお見舞いに来ないのかい？」

「あー…姉さん。姉さんね…」

軽くこめかみの辺りを押さえる。

「実は俺…姉さんには教えてないんですよ、病室」

「はあ？」

おばさんが素っ頓狂な声を上げる。そりやそうなるよね。

もちろん、俺だって別に意地悪でこんな事をしたわけじゃない。ちゃんとそれなりの理由があつてのことだ。…本当なら入院、ひいては事故のことそのものを隠したいところだったけど。

なぜなら…

「姉さんの趣味は俺の身を心配することだからね。この事を姉さんが知ったらどうなる

か…」

「どうなるって言うの?」

「楓ええええええええええええええええええええええ!!」

「こうなるんだよ」

車椅子でF1カーのような加速とドリフトを華麗に決めながら、病室に小柄な女の子飛び込んでくる。

俺と同じ顔、同じ体格、同じ声。言うまでもなく、我が双子の姉、八神はやてだ。

おばさんには目もくれず、華麗なスピンドでベッドの真横に車椅子を停止させる。

もう俺の知ってる車椅子じゃねえなこれ。つかどうやったの?

「楓! 怪我痛ない?」

「ババアになんか変なことされてへんか!」

「おい姉さん! そんな言い方したらババアに失礼だろ!!」

「あんたもね」

「ごめんな、楓。お姉ちゃん、楓が痛い思いしてる時になんもしてあげれなかった…お姉ちゃんのこと嫌わんといて!!」

いや、嫌わないし。ちよつとウゼエけど。

「それと何でお姉ちゃんに場所教えてくれへんかったん!? お姉ちゃん心配で心配で昨

日はお風呂もご飯もトイレも行けんかってんよ!？」

「いや、それまあ……ごめん。姉さんに心配かけたくなかったんだ」

あと、今まさに起きてる姉さんの暴走を食い止めたかったんだけどなあ……。でも確かに唯一の肉親としては不義理な態度だったかもしれない。

いや、まあ、あんなしょうもない理由で事故ったからどんな顔して会えばいいのかわからないっていうのもあったんだけどさ。

「というか、風呂と飯はともかくトイレには行こうよ……。ねえ、姉さん。これから俺の入院中は自分のことは自分でしなきゃ駄目なんだよ?」

「……えっ?」

姉さんの表情がピシリと凍る。まるで世界の終わりでも聞いたような顔だ。

そして、姉さんがおもむろに携帯電話を取り出して誰かに電話をかけはじめた。何秒かのコール音の後、相手につながった様だ。

「石田先生、恋の病がひどいんで入院したいですう」

『ごめんね、バカにつける薬はちようど切らしてるの』

ブチツと、電話が切られる。

それさうだろうよ。俺も今兄弟の縁を切りたくなかったもん。

「いややあ! いややあ! 楓のいない生活なんて耐えれへん!!」

車椅子に乗ったまま手を放したまま車椅子を動かすという奇妙な駄々のこねかたをする。何だよそれ？ 何がしたいんだよ？ どうなってるんだよ？

「分かった。分かったから！ 姉さんがお見舞いに来てるうちは相手するから！ ね？」

「うう…分かった……。あつ」

さつきとは一転、姉さんは何故かやたらニコニコしながら俺を見ていた。いや、正確には俺と、ベッドの近くに備え付けられた車椅子を見てだろうか。別に姉さんにとって車椅子なんてさほど珍しくもないだろうに。

「おそろいやねー！」

うん、嬉しくないね。というか車椅子がおそろいで喜ぶ兄弟とか気持ち悪いわ。

「それよりも楓、またそないな喋り方して…。そんなに方言が嫌なん？ お姉ちゃんホンマ悲しいわ…。お姉ちゃんのこと、嫌いになってもうたんか？」

「ああもうめんどくせえよこの姉!! でも大好き!!」

「私も愛してる！ でも、それならなんで喋り方変えたん？」

「それは…っ！」

言っつていいものか一瞬迷う。

でも、姉さんの表情からして、言わないと絶対に納得しないんだろうなあ…。ああ、分

かったよ、言うよ。言いますよ。

「…だつてさ姉さん、俺が関西使うたんびクラスの奴らにからかわれるんやもん！
いや、別にそれだけならええねんで？ でもな？ あいつら面白がって似てもないへっ
たくそなな関西弁のマネしだすんやもん！ 耐えられへわ!!」

『くくやねんで!』とか言つてとけば関西弁になると思っているやつとかはかなり
イラツと来る。馬鹿か。あと姉さん、俺、別に愛してるとは言つてないです。

まあそんなもつて、案の定姉さんは日中ずっと病院に入り浸るようになった。
日本よ、これが姉だ。

類は友を呼ぶつてある意味詰みだよね

人は自ら悪魔を創り出す。

誰が最初に言ったのかは知らないけど、とりあえずトニー・スタークが言ったのは知ってるからそれでいいや。

でも俺はこの言葉を始めて聞いた時、はずかしながら正直よく意味を理解していなかった。でも今ならばつきり分かる。なぜならその日、俺自身が気付かぬうちに一人の悪魔を生み出してしまったんだ……

——ピンポーン

滅多に鳴ることのない玄関口のジャーヴィスこと、インターホンが来客を告げる。うちに来るのなんてババアか石田先生か三河屋のサブちゃんくらいなので、わざわざインターホンを押すのは宗教の勧誘か新聞の勧誘かキャッチセールスくらいなので、どうにもこの音を聞くと億劫な気持ちになる。

「はい、ただ今………げっ」

来訪者の正体はあの入院騒動以来、変な縁ができているバニングスさんと月村さんだった。

…まだセールスの方がましだったな。

——よし、気付かなかったフリをしよう。

息を潜めて扉に背を向け、足音を立てないように忍び歩きをする。

「出ないね…楓くん、留守なのかな」

「仕方ないわ、帰りましょう。せめてあいつが休んでる間に見つかった奇妙な一人交換日記だけでも届けたかったけど」

「やあ、二人とも。今日もとてもいい天気だね」

思わず出てしまったが後悔はない。今出なければ俺はきつと何か大切なものを失っていただろう。というかなんで俺の日記の内容が交換日記風になっていることを知っている？ 読んだな貴様。

「あつ、楓くん！こんにちは！」

「はい、こんにちは。ごめんね、玄関で待たせちゃって。ちよつと手が離せなくてさ」

「…あれ？ あんたこの前死んでなかったっけ？ まあいいや」

よくねえよ。死んでない上に生きていた奇跡を『まあいいや』で済ませんな。鬼か。突然押し掛けてごめんね。楓くんが休んでいた間のプリント持ってきたんだ。…迷惑

だったかな？」

「迷惑だなんてそんな！こつちこそわざわざこんなことさせちゃつてごめんね？」

「ううん、好きでやつてることだから！」

なんて心優しいんだ月村さん。どこぞのイエローデビルとは大違いだ。なんだかこの人を見ていると心が洗われるようだ。きつと前世は天使に違いない。

あつ、でも俺この前天使に拉致られかけたんだっけ？ まあいいや！

そんなことを考えていると、奥の部屋から「おーい」と陽気な声が響いた。もちろん、姉さんだ。

『楓ー、お姉ちゃんとゲームしよー』

「いいよー、ちよつと待ってー」

「…誰？」

「ん？ああ、そういうえば二人は会ったこと無いっけ。俺の双子の姉さん」

「えっ!？」

バニングスさんがわなわなと体を震わせながら、信じられないものを見たような目で俺を見る。

「あんた…！ぼつちを拗らせすぎて遂にクローンを…!」

「違うからね？俺が弟だからね？」

というかぼつちを拗らせるって何だよ。仮に拗らせたとしてもクローンを作ろうって言う発想にはならないよ。アンタ未来に生きてんな。

「…まあ、とりあえず上がっていつてよ。お茶くらい出すからさ」

「え、いいの…?」

「うん。姉さんもきつと喜ぶし、俺も基本的に暇だったからさ」

「知ってるわよそんな事」

何か余計な一言が聞こえた気がするが、無視して二人を姉さんのいるリビングへと案内する。この機会に紹介しておくのもいいだろう。特に月村さんとは是非姉さんと友達になってもraitたいし。バニングスさん? どうでもいいや。

リビングのドアを開ける。

「これからこのゲーム機を楓が…ふひっ、ふひひっ…。だつ、誰!? 何してるんや!」

——閉めた。

あんたこそ何やってんの?

なんで実の弟のゲーム機に息荒くして頬擦り付けてんだよ。ちよつと意味わかんない。一体何がしたいんだよ? それ楽しいの? 気持ち悪いというか情けなくなってくるわ。

「な、なかなか個性的なお姉さんだね…」

見ないで、そんな穢れを知らない目で俺を見ないで。

気を取り直して、ドアをもう一度開くと、変態が「あら、いらつしやい。ごきげんよう」などのたまっていた。姉さん、猫かぶつてるところ悪いけど、ポケットから4DSが顔を覗かせてるぞ。

「私、八神はやて言います。ちよつと訳有りて学校は休学してるけど、同じ年なんでよろしゅうお願いしますー。二人は楓のお友だち？」

「いや、そういう訳じゃないです」

1秒と待たずに即答されるとなかなか心に来るものがあるね。巷で流行りのツンデレってやつかな？

「友達と言えば、前はよく高町さんと遊んでたよね？今日はいないの？」

「んー…、なんか最近なのは忙しそうなのよね。誘っても用事があるって断られるし」

そっか。まあ、高町さんもいろいろ忙しいんだろう。

自己紹介も済ませたところで、姉さんの「せっかくやからアリサちゃんとすずかちゃんも一緒にゲームせえへんか？」という提案し、皆でポケモンをすることに。

意外なことに、渋るかと思つたバニングスさんは乗り気で姉さんの提案を受け入れていた。そうか、同じ顔でも君が刃を向けるのは俺だけなんだね。特別な関係って素敵やね。

「そういえば、月村さんはもう凶鑑揃えた？」

「えっ!? う、ううん。数が多くてまだ全然なんだ…。楓くんは？」

「俺も全然なんだ。月村さんさえよければ後でお互い持つてないのデータ交換しない？」

月村さんは頬を紅潮させながら顔を縦にブンブンと振ってくれた。これはオツケーつてことでもいいのかな? というか今ポケモン何体いるんだろうね? ポケモンは全部で151匹とか言つてたオーケド博士は今息してるのかな?

「あつ、コラツタや! 可愛いから『カエデ』って名前つけよ!」

「うわつ、メタモンだ。相変わらずむかつく顔してるわねこいつ。『カエデ』って名前つけとこ!」

「どつちも変えろオツ!!」

両親から貰った大切な名前を齧歯類とスライムもどきに取りられてたまるか!

というか後半どういふことだよ! もう一人同じ顔いるじゃん!

「なんでバニングスさんはそうやって俺を貶したがるの!?! 俺、バニングスさんに嫌われるフェロモンでも出してんの!?!」

「だって、抑えきれないだもん、この気持ち…」

「悪意だよな? それ完全に悪意だよな? 頼むから抑えつけてよその気持ち!」

「まあまあ、そんなことよりちよつとあんたの手持ち見せてよ。…へえ、意外といいの揃えてるじゃない」

そんなことって言いやがったよ、このアマ。

まあ、俺の確かに手持ちは伝説やら幻と言ったものこそ入っていないが、低いレベルから地道に育て、あらゆるタイプとのバトルに対応できるようにした非常にバランスのとれたパーティーに难道だけどね。どや。

「なんだつたら後で通信対戦してみる？バニングスさんにだつて負けないと思うよ」

「何言つてんのよ？ あんたにとつては通信機能なんてこの世に存在しないに等しい機能じゃない」

OK、バカにしやがったな。

「あのねえ、今時友達がいなくなつて通信くらいできるんだよ？ ケーブル使つてた時代じゃないんだから」

Wifiを使った対戦とかすごいよね。全国どこにいるお友達とも気軽に通信できるんだもん。多分発明した人は俺と同じぼっちだったんだらうな。

「……？ ……ああ、今もしかしてあたしに話しかけてた？ ごめん、また見えない友達に話しかけてたのかと思つた」

「ねえ、バニングスさん。君の中の俺は集団の中で親しげに独り言をする人間なの……？」

話してたじゃん。たった今まで楽しくおしゃべりしてたじゃん。なんかもう、だんだん怒りより恐怖が勝ってきた。俺、なんかこの人に悪いことしたっけ…？

やがて1時間もするとボケモンにも飽きてしまい、手持ち無沙汰になってしまった。リビングでだらだらと過ごすのもいいが、他ならぬ月村さんに退屈な思いをさせるわけにはいかないと、何か別の暇潰しを考えることに。

「姉さん、何か録画してるアニメとかなかったっけ？」

「うーん、アニメは無いなあ…。あつ、昼ドラの『恋破れた幸子。』駄目よ、私には心に決めた人が』があった」

「なんでそんなもんが家のHDDに混ざってるの!？」

普段楓が学校行ってる時に見てるんよ、とのこと。

俺がいない間家で何やってんだよ姉さん…。

結局、他にやることも思い付かないので、ソファに横一列になつてみんなで仲良く昼ドラを鑑賞するはめに。

うわつ、幸子さんの旦那さん浮気してやがる。というかこれ、タイトルの逆じゃねえの？ あつ、幸子さん浮気に気付いて出家した。え、これそういう話なの？

その後、幸子さんが尼になるための修行が延々と繰り返されてドラマは終わった。クソドラマじゃねえか。

とうか俺達も俺達で何で小学生が4人も揃って放課後に昼ドラ見てんだよ。

俺達が三者三様にドラマの内容にケチつけながら昼ドラを見ていた中、一人食い入るように幸子さんの生き様に見入っていた月村さんが不意に口を開いた。

「…ねえ、はやてちゃん。はやてちゃんだったらどうする？　もしも、好きな人が別の女の人と仲良くしてたら？」

「えっ、楓が？　そうやなあ…とりあえずその人がどんだけ楓を好きか試させてもらうかなあ…」

「具体的にはどんなことするのよ？」

「具体的に？」

「そうやなあ…まず第一関門は楓の昔の写真を見せて、当時の身長、体重、座高、趣味を正確に言い当てるテストから始めよかな」

「…すごく具体的ね」

「ああ、ちなみに今のところこれをクリアできたんはお姉ちゃんだけやから安心してな
！」

今の会話に安心できる要素が一つでもあったのなら教えてください。

「そういうアリサちゃんは？」

「あたしはよく分かんないわね。正直、人を好きになるとかまだよく分かんないし。楓は？」

「え、俺？好きな人が別の人と仲良くしてたら？」

「ううん、もしも自分の正体が実はメタモンだったら」

「そんな俺も分かんないよ!? なんか俺だけ質問の方向性おかしくない!」

「というか昼ドラ見ながらずっとそんなこと考えてたのかよバニングスさん。『この幸子って女、やるわね。ねえ、メタ：あ、楓』とか言ってたのはそういうことかよ。もう完全に俺を姉さんに変身したメタモンとして扱ってんじやねえか。」

「で、楓は実際のところどうなん？」

「もしお姉ちゃんが別の男の人と仲良くしてたらどないする？嫉妬か？嫉妬か？」

「安心」

「そして心配かな。主に相手の。」

「とうかかなんで姉さんの中ではナチュラルに俺の好きな人〓姉さんになつてんだよ。いや、そりゃ好きだけどさ。家族としてなら。」

「…やっぱり、楓くんは嫉妬しちゃう女の子なんて鬱陶しいって思う…?」

「へ?」

月村さんから飛んできた予想外の質問に思わず間拔けな返事をしてしまう。

「いや、俺は特に鬱陶しいとかは思わないけど…」

「ほ、本当っ!?!」

なんなんだ？ やけに食い付いてくるな…。なに、好きな人でもいるの月村さん？

は？誰だよこのレベルの女子に好かれてるハッピーボーイは？ 相手死ねばいいのに

クソが。

…うん、虚しくなるから止めよう。

まずは月村さんを励ますとしよう。どうやら自信が無いみたいだし。

「本当だよ、月村さん。だって嫉妬してもらえるってことは、相手がそれだけ自分の事を好きでいてくれるってことでしょ？ それってすごく嬉しいことだと思うな」

「そ、そうだよねっ！他の女の子と仲良くしてたら嫉妬しちゃうのは普通だよね！」

「うんうん、普通普通」

「最近遂に盗聴器と監視カメラにまで手を出しちゃって不味いかなって思ってたけど、普通なんだね！」

「うんう——ん？」

「あとは帰り道をずつとバレないように付けてニヤニヤしたり、ときどきお弁当の使用済みのお箸を新品の物と交換したりするのも、普通だったんだねっ!!」

「ごめん、それはちよつと異常だわ」

月村さんは一人で「普通普通！」とはしゃいでいらつしやる。もう聞いちゃいねえな。駄目だ、この子だけは常識人かと思つてたけどそんな訳なかつたね。バニングスさんとか可愛いレベルのヤバイ人だったんだね。というか後半普通にストーカーじゃん。死ねとかいってごめん、名も知らない男子。君らやっぱお似合いのカップルだ。どうか永遠にこの子を幸せにしてやってくれ。

この日、俺は二度とこの人たちには関わらないで置こうと固く決心したのだった。

授業参観？ いいえ、授業崩壊参観です

授業参観。

「ふう……」

手に持ったプリントを見て、思わず息が漏れる。授業参観のお知らせ…可愛い熊のイラスト付きで、そうでかかど書かれたプリントこそが、この溜め息の原因だ。

そもそも授業参観って必要なのか？確かに人によつては素直に喜ぶのかもしれないし、また恥ずかしがりながらも明らかに普段よりハッスルする奴だっているだろう。

でも俺はというと、そのどっちでもなかった。両親ともいない家には関係の無いことだし。

いや、授業参観そのものは全然構わないんだ。

そもそも悩んでいるのは別に親が来なくて寂しいとかそういうんじゃないんだ。

「問題は…今後ろにいるあんたなんだよ……」

おっと、思わず声に出してしまった。

でもしょうがないだろ？ だって今俺の背中ではこの世のありとあらゆる悪夢をかき集めて、長時間煮込んでスパイスで味付けしたようなカオス空間が広がってるんだぜ

?

ああ、そもそもあの日、俺が姉さんにあんな話さえしなければこんなことには――。

姉さんと2人、夕食を囲む。いつも通りの風景。そして、姉さんがいつも通りニコニコしながら俺にその質問をした。

『楓、今日は学校どうやった? なんかええことあった? お姉ちゃんに聞かせて欲しいな』

『特に何も無いよ。あー…でも…』

『うん?』

一瞬、姉さんに言っているいいものか迷う。だが、隠したら隠したで後で拗ねられても面倒だし、白状しておくか。

『…なんか授業参観やるらしいよ』

『授業参観っ!』

姉さんが勢い良く身を乗り出して顔を近づけてくる。なんか鼻息が荒くて怖いんだけど。

『もしかして…来るつもり?』

『え？ そんなあたりまえやん。行くに決まっとるよ』

なんでそんなんわざわざ聞くん？ とでも言いそうな顔だ。まあ、正直そう言うと思つてたけどさ。

『いや、いーよ来なくて。そもそも授業参観つて姉弟が見に来るもんじゃないから…』

『そうやけどお…ダメ？』

『駄目。そもそも休学中の姉さんが学校に来たら、先生に見つかつて病院に逆戻りだよ？ どうするつもりなんだよ？』

『うー、そうやけどお…うう…』

「姉さん、あの後もずっととうーうー唸つてたけど、変な気を起こさないだろうな…。いや、姉さんのことだ、またなんか妙な事を考えてるに違いない」

確か去年は家にあるパーティーグッズの髭眼鏡付けて「父です」って真顔で先生見つけてたしな。今の内に姉さんが何かやらかした時の対策をしっかりと考えなきゃな……うん、時間の無駄だな。

「楓くん！ 楓くん！」

そんな憂鬱な空気を切り裂くような、明るい声を掛けられる。月村さんだ。

ウエーブの掛かった長く綺麗な紫色の髪に端正な顔付き。こんな可愛い子が実はパツパラパーの変人だつて言うんだからから世界つて面白いよな。

「ん、どうしたの月村さん。なにか用事?」

一緒に盗撮同好会作らない? とかいうお誘かな。恋する乙女つて誰しもアグレッツシブになるもんだもんね。盗撮、盗聴、家宅侵入ぐらいはみんなするよな。はっはっはっ、月村さんはいじらしいなあ。

…うん、無理だわ。どうにかして月村さんをおつかつての天使に戻そうとしたけど、俺の思考回路じゃ限界つてもんがあるわ。

「楓くん、これ…あげるねっ!」

月村さんから可愛らしいラッピングの施された四角形の箱を渡される。

「…俺、今日誕生日じゃないよ?」

「うん、6月4日だよね?」

でもこれは誕生日プレゼントじゃなくてお礼なんだ」

はて、俺は何か月村さんにお礼を言われるようなことをしたっけ?

「楓くん…私に気付かせてくれたよね。好きな人の為なら」

体操着の匂い嗅いだり、使用済み水着を新品と交換したり、着替え中の写真を肌身離

さず持ったりするのも全然おかしいことじゃないんだって。私、楓くんにも勇気を貰ったんだ！ だからそのお返し」

「すげー言い辛いけど君おかしいよ」

そのブラックゾーンを堂々とホワイトと言い切る姿勢、俺は好きかな。ちよつと関わり合いにはなりたくないけど。とうかささりげなく罪状に盗撮が混ざってる時点で十分にアウトだろ。

「楓くん、私がんばるね！」

「恋は盲目って言うけど、月村さんの場合耳まで聞こえなくなるんだね」

この子実は危ないお薬でもキメキメしてんじゃないの？

とうかこの子、さも当然のように俺の誕生日当てたけど、月村さんに誕生日教えたっけ？ …いや、深く考えるのはよそう。考えれば考えるだけお互いが不幸になる。どのみち月村さんの意中の相手が人柱にさえなってくれば全ては終わるんだ。

「えつと…開けてみていいかな？」

「うん！」

ゆつくりと月村さんから渡された小さな箱を開ける。小さいので最初は小物でも入っているのかと思っただけど、中身は手作りらしい色とりどりのドーナツだった。

よかった。これでもし渡されたのがお勧めの盗聴器とかだったらどうしようかと

思ってたよ。

「すごく美味しそうだね。ありがとう! 帰ってから食べさせてもらおうよ!」

「うんっ! 特別な材料も使ってるから楽しみにしててね!」

月村さんの言葉に、思わず胸が高鳴る。下世話な話、月村さんの家はお金持ちだ。その月村さんが特別というくらいだからそれはそれは美味しいんだろう。この期待感ばかりとすごいで。特別な材料って言うくらいだから……トリュフとか? 食べたことないけど何かリッチなイメージがあるし。

「——ふふっ……」

——キーンコーン、カーンコーン。

授業開始のチャイムが鳴り、生徒はいそいそと席に戻り、次に父兄の人達が次々と教室に入ってくる。随分と若いお母さんや、気合い入りまくりのお父さん、逆におじいさんやおばあさん、トトロなんかがいた。

トトロは「んん……んばっ!!んん……んばっ!!」と奇妙な声をあげながら手を上下させている。

……うん、どう見ても姉さんだね。確かにトトロは子供にしか見えないから先生にはバ

れないね。すごいね、考えたね、賢いね姉さん。バカじゃねえの？

俺に気付いたトトロがぶんぶんと友好的に手を振ってくる。なにそれ？ ネコバ
スでも呼んでんの？

もうやだ……なんなのこの学校？ 休学者含めて変な人しかいないんだけど……。

「何してんの!?! いや、むしろ何してくれてんの姉さん!?!」

トトロの胸倉を掴むと、トトロは「んばぼっ!」と声を洩らした。なに、驚いてんの？ そうだろうね、俺だってトトロに掴みかかる日が来るとは思わなかった。欲しくな
かったよそんな現実。

「だって楓の授業参観来たかったやもん……」

「やもん……じゃねえよ! 見ろよクラスの反応を!」

誰一人としてトトロに目を合わせようとしてねえよ! 子供の時にだけ訪れる不思議

な出会いなのに!」

「みんな大人の階段登ったんやろ」

「生々しいトトロだな!?! いいから脱いでよ!」

「えっ、こんな所で!?! でも、楓がそう言うんなら……」

「はい、八神くん。もうチャイム鳴ったから座りましょうね」

「あつ、す、すいません、先生! ……とにかくもう来たことはいいいから早く着替えてね

姉さん。恥ずかしいから」

「?」

僕にはそこで可愛らしく小首を傾げられる姉さんの神経がちよつと分かんないかな。生まれて初めて姉さんを本気のグーで殴りたくなつたよ。

ここで姉さんといつまでもコントをやっているわけにも行かないので、トトロの胸倉を離して席に戻る。

「えー、今日は英語の授業を行います。みなさん! 保護者の方の前だからって緊張せず、いつも通りにやりましょう! ではまずは和訳問題です」

明らかにいつも通りじゃないテキパキとした動きで先生が黒板に例文を書いていく。いるよなあ、こういう言ってる本人が明らかに緊張しまくりな先生。

『問 Susie has a pen.』

答えはスージーはペンを持っています。まあ、簡単だな。スージーがペンを持つてるからどうしたって話ではあるけど。

「それじゃあ答えが分かる人は挙手を……。あらあら、みんな緊張してるのかな? じゃあ父兄の方で分かる方は……」

「はいっ！ はいーい！」

「えつと……それじゃその……え？ トトロ？ え？ なんで？ ……とりあえず、トトロさん、どうぞ……」

なんかだんだん語尾が震えてたけど、これ絶対怯えてるよね。そりや大事な授業参観になんか妖怪混ざってんだもん、無理ないよ。

ごめんなさい、先生。あなたは正常です。そいつは俺が責任を持つてお隣に返還するので気にしないでください。

「寿司恵はペンを持つていますー！」

「えー……正解です」

おい、それでいいのか教師。寿司恵だぞ。今絶対に面倒だから諦めただろアンタ。

「えー、この『has』という動詞は『have』の三人称単数形で『持つ』という意味があります。では次は、このhasを使うて例文を作ってみましょう。では……バニングスさん、お願いします」

「はい」

バニングスさんは緊張した様子もなく、綺麗な文字でスラスラと英文を書いていく。もともと海外の血を引いている為か、その姿はすごく様になっていて、思わず少しかっこいいとさえ思ってしまった。

『Susie has no future. After all, she can't stand the store front because she is weeds.』

(寿司恵に未来はありません。彼女は所詮、花屋の店先には並べない雑草だったので。)

「な、なかなか個性的な回答ですね…。先生、ついつい寿司恵さんの身に何があつたのかと深読みしてしまいます」

「とうかなんでバニングスさんまで寿司恵を推してんだよ。ちよつと気に入つたのかよ。スージーが何をしたつて言うんだ。」

「で、では次は隣の席の人と教科書に書いてある英会話を実践してみましよう! アドリブ込みでもいいですよ」

『はい!』

隣の席：右側は月村さんだから、左側の田辺くんにしよう。あつ、でも俺、田辺くんに話しかけたこと無いから気まずいわ。やっぱ月村さんにしとこ。

「じゃあ始めよつか! 楓くん!」

君は君でなんで準備万端なの? いや、ありがたいけどさ。

「えーつと…How are you? (調子はどうですか?)」

「I, m fine. There was a thing very good today. (元氣です。今日はとてもいいことがありました)」

流星は月村さん、会話に全く淀みが無い。変態だから忘れがちだけど、この人学年でも1, 2を争う秀才なんだよなあ。変態だけど。

「次は…: What is your hobby? (貴方の趣味は何ですか)」

「My hobby is to smell the smell. Can I sniffed your smell? (私の趣味は臭いを嗅ぐことです。嗅いでいいですか?)」

「ええと、It, s my…: つて、ちょッ、What!? そんなこと教科書に書いてあつてあつたつけ!?! とうか人としてどうなのその質問!?!」

「Or, please the used underwear. (もしくは、使用済みの下着をください)」

「Syoukini modotte Tukimurasan! (正氣に戻つて月村さん!)」

なんでこの人今日に限つてこんなにブーストかましてんだよ。意味分からん。とうか今まで怖くてごまかしてたけど、これ完全に狙われてんの俺じゃん。やっぱり意味分からん。告白されて「え? なんだつて?」とか言う難聴野郎とか鈍感野郎っていけ

好かないって思ってたけど、気付かねえよ。俺、月村さんと会話したの3〜4回くらいだぞ? なんてだよ。

そしてその後、ひらりはらりと月村さんの暴走をかわしつつ、やっと長い授業は終わりを迎えた。

「はい! 先生の心をバツキバキに折ってくれた授業参観はここまでです! 先生、今年で32になりますが、ここまで早く学校から帰りたいたいと思ったのは小学校以来です。それでは最後に今日の授業の感想を誰かに代表で言ってもらって終わりましょう、そうしましょう! では…八神くん、お願いします」

「はい」

ヤケクソ気味の先生に指されて立ち上がる、今日の授業の感想?

そんなもん、1つに決まってる。クラスの守護神となったトトロ、寿司恵・バニングス、俺のパンツを執拗に狙う月村さん…その姿が脳裏に浮かんでは消えていった。

「なんでこうなったの……?」

俺は、ちよつと泣いていたかもしれない。

八神楓の一日は大体こんな感じ

俺達姉弟はとても仲がいい。

正確には、姉さんが一方的に俺を溺愛しているって感じだけ。具体的には俺が1年生の時に書いた『ぼくの大きなおねいちゃん』というこっぴどくかしい題名の作文を額にいで飾ったり、趣味は俺のことを心配することだって言うくらいにはブラコンだ。これは本人が以前聞いてもいないのに熱く語ってくれたから間違いない。

まあ、世間一般でいう過保護というやつだろう。

俺の一日は、そんな姉さんの布団を引っぺがして起こすことから始まる。

「おはよう、姉さん。ほら、もう朝だよ」

「うーん……、あと5分だけ……」

「うん、いいよ。じゃあ俺は勝手に準備して学校行くからね」

「起きるっ」

ガバツと勢いよく姉さんが布団から飛び出す。こういうところは扱いやすくて助かる。

「かえで、きょうのあさごはん、なに〜？」

「ご飯と味噌汁と焼き魚だよ。それよりも姉さん、眠いんだつたら別に無理に起きてなくてもいいんだからね？」

「ううん。おきる〜……いっしょにごはん〜」

姉さんを起こした後は、自分の弁当と、朝ごはんを作るのが俺の日課だ。

弁当に関しては姉さんは自分が作りたがってたけど、姉さんに任せたらそこかしこにハートが散りばめられた、新婚のリーマンの愛妻弁当みたいになるので却下した。

15分も経つ頃には完全に覚醒した姉さんと2人で朝ごはんを食べる。

「あつ！ まだ味噌汁熱いかもしれん！ お姉ちゃんがふーふーしたげるからね！」

「いや、そのくらい自分でやるよ……」

心配されているっていうのは分かるけど……そういうのは、なんとというか困る。この年にもなつて人にふーふーされるのは流石に恥ずかしい。

そして姉さんに見送られながら学校へ行き、授業を受ける。休み時間は寝たふりをしているけど、誰も話かけてこない。みんなコミュニケーション能力ないんじゃないの？

「楓くんっていつも授業が始まるとすぐに起きられるからすごいよね」

「違うわすずか、あれはね？ 寝てるんじゃないかって、あいつなりの祈りのポーズなのよ。」

ああしていけばいつか誰かが声をかけてくれるって信じてるのよ。成功率0だけど」
「そうなんだ！　じゃあ話しかけなきゃ起きないんだね！　今のうちに靴下貰つてくるね！」

何故かは分からないが、足元で荒い鼻息を感じたかと思うと、続いて勢いよく靴下が引つ張られた。やめろ、脱がすな。その靴下を持っていつてもサンタは来ないぞ。

帰り道、普段の帰宅路で『XII』と書かれた綺麗なビー玉を拾った。あんまりに綺麗だったから一瞬宝石かとも思ったけど、こんな所に宝石が落ちてるわけないよね、常識的に考えて。

ビー玉を片手で弄びながら帰っていると、不意に後ろから声をかけられた。

「それを……ジュエルシードを渡してください」

声の主は黒い服に金髪の可愛い女の子だった。じゅえるしーど？　……ああ、もしかしてこのビー玉のことかな？　だとしたら勝手に持つて行ったことを謝らないと。

「ごめん、落ちてから勝手に持つてっちゃった。これ、君のだった？」

「いや、そういう訳じゃないけど……母さんがそれが必要だった」

女の子はどこかおどおどとした様子で答えてくれた。さっきからあんまり目も合わ

せてくれないし、あんまり人と話すことに慣れてないのかも。もしかして仲間か？

「……ま、いいや。はい、どうぞ」

「……いいんですか？」

本当なら落としたものは一度交番に持っていくのが正しいんだろ……まあ、別にいいだろ。ビー玉くらい。

「別にいいよ。元々俺のじゃないし」

それにウチ親いからさ、お母さんの為とかって……なんというかちよつと羨ましい。というのは言わないでおこう。初対面の人にするような話じゃない。

「ありがとう……よかった……。今度はあの人達が来る前に回収できた……」

「あの人達？ もしかして君の他にもそのビー玉を探してる人がいるの？」

「はい……えっと、私と同じくらいの年の女の子と、意地悪なことばかり言うフェレットが……」

女の子が嫌なものでも思い出したような表情を浮かべる。

意地悪なフェレット……ってどういう意味なんだ？

あ、自分にだけ噛みついたりしてくるとかかな？

「チツ、女か。どこかその辺で待ってなよ。後で適当に相手してあげるからさ、なのはが」とか『生憎だけど僕はホモなんだ！ 魔法少女に興味なんてないね！』って言うって

くるんだ……」

「そりや確かに嫌だわ！」

なにその予想の遙か斜め上を行く意地悪!?

意地悪というか、怖いよそのフェレット。

事情は分かんけど、全世界の少年少女に同時に喧嘩売ってんじゃん。買いたくもないけど。

「ま、まあ、きつとフェレットの世界にもいろいろとあるんだよ。いろいろと。腹立つだろうけど、動物相手だし大目に見てあげよう？」

「じゃあ君はもしそのフェレットに『ホモニーング！』って元気よく挨拶されたらどうする？」

「無言で川に突き落とす」

「……私も次からそうしよう」

無言で女の子と熱く握手を交わす。なんだか知らないうちに変な友情が芽生えたみたいだ。それにしても、ツンドラとブラコンとストーカーの次はホモかよ。世界はいつの間にかこんなことになったんだ……。

「え、えつと……これ、XIIとかかいてあるけど、何個かあるものなの？」

少し強引だけど話題を変える。だって健全な小学生二人がホモの話しててもしょう

がないじゃん。

「はい、えつと……全部で21個あって……」

21個……もしランダムに町にばら蒔かれてるとしたら、一人で探すにはちよつと酷な数だ。

「本当は探すの手伝ってあげたいけど、俺もちよつと事情があつてき……。でも、もしまた見つけたら必ず連絡するよ」

「!! ありがとうございます!!」

「うん。大変だろうけど頑張つてね。俺も出来る限り気を付けてみるからさ」

ペコリと可愛らしくお辞儀をする女の子に手を振りながら、再び帰宅路につく。

久しぶりにまともな人と会話したおかげか、ちよつとだけ足取りが軽くなった気がした。それにしても可愛い子だったなあ。また会いたいなあ。えつと、たしか……

「……あつ、名前聞き忘れた……。これじゃ連絡取れないじゃん」
足取りはまた重くなった……。

「楓ー、お風呂行こー」

「いいよー、ちよつと待ってー」

姉さんは生まれつき足が悪い。

この家は姉さんの体に合わせたバリアフリーデザインなので、姉さん一人でも問題なく生活できるのだが、人の助けがあるに越したことはない。

例えば、風呂もそうだ。湯船に入ること自体は出来ても、そもそも服の脱ぎ着がままならない。

実際、姉さんとは生まれてから風呂には一緒に入った記憶しかない。流石に俺もこれは介護の一環として割り切ってるので、あんまり恥ずかしいという事はなかった。

「お姉ちゃんが髪の毛洗ったげる！ あつ、あと体も！ と、特に前とか…フヘツ」

……そう、恥ずかしくはない。ただ時々イラツとくるだけで。とりあえず今も身の危険を感じたので、フェレットよろしく湯船に突き落としておいた。

続いて俺も湯船に入ると、今度は後ろから抱きつかれそうになったので、今度は冷や水をぶっ掛けておいた。

「か、楓も最近遅しゆうなってきたな……。アリサちゃんとかすすかちちゃんのおかげかな？」

あと間違いなくアンタのおかげだよ。

「じゃあ平和な恋バナでもしよか。楓は誰か好きな人とかおらんの？ 誰やって好きな人くらいいるやろ？ 言うまで出ていかさんからな」

うわあ、めんどくさいわこの人。

とうかこっちはそもそも好きな人ができるほど知り合いいないんだよ。知り合いなんて精々……

「あつ」

自分でもどうしてか分からないけど、今日ビー玉を上げた、お母さんの為に頑張っているというフレット嫌いの女の子のことを思い出した。

「好きな人とかはいないけど……友達なら一人当てができたかな」

「友達!? 楓に!」

また今度家にも招待せな! お姉ちゃん、腕によりをかけてご馳走作るで〜!」

もう完全に反応がお母さんのそれだな。本人に言ったら『お母さんやのうてお姉ちゃんやの!!』ってキレルから言わないけど。

「それで、その男の子はなんて名前なん?」

「あく、実は女の子なんだ……」

「オンナノコ! なんや可愛らしい名前やねえ」

頬に手を当ててあらあら、と姉さんが微笑む。あくまで認めないつもりかこの人。風呂から上がり、姉さんの体を拭いてから着替えさせたら、後はもう寝るだけだ。

2人の部屋においてある二段ベッドの上が俺、下が姉さん。

もつとも、姉さんにせがまれて下の段で二人で寝ることがほとんどだけど。例えば今日とか。

「お姉ちゃんが子守唄歌ってあげよか？」

「いや、流石にこの年で子守唄はいいよ。はずかしい」

子守唄で寝かしつけてもらおう小学3年生とか絵的にちよつと痛すぎるだろ。しかも姉さんの子守唄はやたらと替え歌を仕掛けてくるから笑って眠れないんだよ。

「そつかあ…楓ももうすぐ9才やもんな……。もうお姉ちゃんの子守唄なんて…ヒック
……いらんよなあ……。エグツ……。でもお姉ちゃん、楓に喜んでもらいたくて……！」

「姉さん、今日は日本昔ばなしのやつがいいな」

姉さんの表情がパアツと明るくなる。

人間っていいんだ？　そういうのはポッチを知ってからほぎけ畜生風情が。

「………楓、もう寝てもーた？」

「………起きてるよ」

夜の12時。案の定姉さんのカオスな子守唄のせいでも寝ることは出来ず、笑いをかみ殺しながら起きるハメになっていた。絶対にこれ明日思い出し笑いする。前も

一回恥じかいたから本気で止めて欲しい。

「……なあ、楓。ごめんな。お姉ちゃんのせいやんな……楓はこんなに優しい子やのに」
姉さんが不意にそんなことを漏らす。

なんのこと？　なんて野暮な事は言えない。無論、俺の交遊関係のことだろう。

前々から薄々とは感じてたけど、どうやら姉さんは自分の存在が俺の重荷になっている
と思うっているようだ。

実際、今までクラスメイトから遊びに誘われることが無かった訳じゃない。自惚れで
さえなければ、当時は休み時間に俺が誰と遊ぶのかを巡ったいざこざさえあつたくらい
だ。もちろん、放課後も。

でも俺はそれをすべて断り続けてきた。

ごめん、今日は。明日も、明後日も——と。

学校が終わった以上、家に姉さんを一人で残して置くわけにはいかなかった。

そしていつしか、俺は遊びに誘われることは無くなっていた。もつとも、嫌われてる
訳じゃないと思うけど。こっちから話しかければ普通に笑顔で返してくれるし。バ
ニングスさん以外。

「でも……楓はいなくなったりせえへんよな？　お父さんとお母さんみたいに……」

姉さんの声は、すこし震えていた。

やっぱり姉さんだって俺と同じ子供なんだ。

誰も側にいないのは寂しいし、一度手に入れたぬくもりを失うのは、怖い。特にそれが、経った一人残った肉親となれば。

本当なら今この場で姉さんを抱き締めて、ずっと一緒だよ、だなんて言っただけじゃなかった。

でも、それはできない。

俺は姉さんを支えはするけど、逃げ道にはならないって決めたんだから。

「……少なくとも、姉さんがいい人見つけるまでは側にいるよ」

結局、自分でもよく分からないような答えを出すことしかできない。

それでも姉さんにはにっこりと微笑んで応えてくれた。

「そっかあ……じゃあやつぱりずっと一緒やね。お姉ちゃん、楓より素敵な人なんて絶対に見つけられへんもん」

「……そうなの？」

それはそれで、すこし問題がある気がする。

「うん、無いよー。私にとって、楓以上の人なんて、絶対におらんしー」

そこまで言っただけで、姉さんは一度言葉を区切る。

「……ごめん。ほんまは私が楓に、お姉ちゃんのごことは気にせんでええんよ……なん

て言えたら良かったんやけどなあ……。やっぱり、お姉ちゃん楓がおらんと寂しいわ」
「……俺も、友達がいないのはいいけど、姉さんがいないのは嫌だ」

俺達姉弟はとても仲がいい。今日だってお互いの絆を確認しあったばかりだ。

だからこそ——その次の日に『彼女たち』が現れたのはは皮肉としか言いようがない
だろう。

家に帰りた……↓家にも帰りたくない……

出会っていうものはいつだって偶然の連続だ。

いつ、どこで誰と出会うかなんて誰にも予想できないだろう。

もしかしたら学校で、映画館で、図書館で、新しい出会いが待っているのかもしれない。

でも、今回ばかりは本当に衝撃的な出会いだったとしか言いようがないだろう。

なにせ俺達の出会いは……あの眩い光と轟音から始まったんだから。

「なつ、なに?! また姉さんなんかしたの!?!」

その時はまだ、姉さんがまた妙なイタズラでも考え付いたのかと思っていた……でも、俺の目に飛び込んだのは、姉さんのイタズラじゃ済まないような現実離れした光景だった。

「闇の書の起動を確認しました」

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士でございます」

「夜天の下に集いし雲」

「ヴォルケンリッター……なんなりと命令を」

何故か空中浮遊していた姉さんの本が何故か光ったかと思うと、その場には何故かさつきまでいかなかったはずの四人組が跪いていた。意味が分からん。

一体何が起こったのか、理解がとてもしつからない。これは夢なのか、そうじゃないのかすら判断が出来ない。

一つ分かつていることは……伝えなければならぬということだけだ。俺に向かつて跪き、忠誠を誓っている彼女達に……この残酷な現実を。

「あの……盛り上がってる所悪いんだけどさ……主、多分あつち……」

『え?』

下のベッドで目を回している姉さんを指差す。

「き、きゆう……」

『……え?』

そんなこんなで、俺と騎士の初対面はなんともマヌケなものだった。

翌日、目を覚ました姉さんを交えて彼女達から事情を聞くと、姉さんの本は何でもべルカとかいう異世界で作られた魔法本で、彼女たちはその持ち主である主……つまりは

姉さんを守るための守護騎士だという。

意外……でもないけど、姉さんはあっさりと彼女達を受け入れる姿勢を見せていた。家族つて言葉に人一倍憧れがある姉さんなら、多分そうなるだろうとは思っていたけど、まさかものの5分で受け入れるとは思わなかった。

一方の俺は——正直どうしていいか分からなかった。

「魔法に闇の書に、その守護騎士ねえ……。にわかには信じがたいけど、魔法つて実在してたのか……」

「……あまり驚かれないのですね」

「まあ、こっちは普段から変な人たちと関わってるからね。ホモのフェレットがいたくらいだし、もう大概のことじゃ驚かないよ。えつと……シグナムさん？」

「我々に敬称は不要です、ご令弟様。我等の事はどうぞ、呼び捨てでお呼び下さい」

「いや、それじゃ俺が落ち着かないし……。そもそもあなた達って——」

「まあまあ、これから家族になるんやし、お互いに変な遠慮は無しや。楓も、詮索するよいうなことはやめとき、な？」

な？　と言われてもこっちだつていきなりこんな事態になれば戸惑うのは当然だ。

正直、未だに何がなんだか分からないんだ。姉さんが完全に受け入れ態勢になつてるんじゃ、俺は疑うしかないじゃないか。

「……家族になるとは言っても姉さん、犬猫を拾うのとは訳が違うんだよ？　これからずっと生活していく以上、少しはこの人たちのこと知って置くべきだと思うけど？」
「うーん……楓の言うことも分かるけど……。そうや！　それやったらこないしよう！」

姉さんが何かを思い付いて数十分後、そこには『どきどき！ 第一回、みんなのことが知り大会!』と書かれた横長の垂れ幕と、なぜかクリスマスやら正月の飾りでデコレートされた我が家のリビングがあった。

早い話、まあ姉さんの悪ノリが始まったよ。

姉さんはまるで面接官みたいに長机とパイプ椅子に座り、同じく正面でパイプ椅子に座らされた騎士のみんなに説明を始めた。

「えー、本日はお日柄もよく、みなさん忙しい所をお集まり頂きありがとうございます。すー。今日はまだお互いのことがよう分かってことで、こういう場を設けました。……つまり、みんなで自己紹介大会や！」

なるほど、自己紹介か。確かに手っ取り早く相手のことを知るにはいいかもしれない。姉さんにしては意外とマトモな提案で安心した。自己紹介に大会があるのかは実に微妙な所だけだ。

「じゃあまずは……お手本みせてあげて、楓」

「自己紹介にお手本も無いと思うけど……ま、いつか。」

えっと、俺は姉さん……つまり君達の主の弟の、八神楓です。あんまり気の効いたことは言えないけど、よろしくお願いします」

パチパチと手を叩く音が3つほど聞こえる。

自己紹介なんて長らくしてないけど、こんな感じで大丈夫だよな？

「えっと、じゃあエントリーナンバー一番、ザファイアーさん。お願いします」

パイプ椅子の一番左に座っていたザファイアーさんが無言で立ち上がる。もう完全に面接じゃん。

「盾の守護獣、ザファイーラ。主の盾となり、あらゆる外敵から御身を守るものです」

盾の守護獣……ザファイーラさん。

褐色の大男でイヌミミという萌えに正面から喧嘩売ったようなヴィジュアルに最初は圧倒されたけど、すごく真面目そうで頼りがいがありそうな印象だった。

前々から俺が学校に行っている間、誰も男が家にいないのは少し不安だったから、その間姉さんを守ってくれるっていうならこれ以上の逸材はいないかもしれない。

なにより、盾のつてのがいいね。盾つてのが。

キャプテン・アメリカもメイン武器が盾だし。

「よろしくお願いします、ザファイラさん。俺が不在の間は姉さんのこと、お願いします」

「はい、一命に代えても」

やだ、かつこいい。俺、もし女に生まれてたら絶対この人に惚れてたわ。

一番手のザファイラさんがこれだけの人格者なら、他のみんなもきつとすごい人に違いないだろう。

最初にみんなが出てきた時は不安だったけど、今は少し安心した。

「では次、エントリーナンバー二番、シグナムさん。どうぞ」

はっ！ と気合の入った返事と共に、シグナムさんが立ち上がる。

座っている間もずっと背筋を張ってたし、生真面目な性格なんだろうか。

「烈火の将、シグナム。主の剣となり、騎士の誇りにかけてあらゆる命令を遂行させていただきます。つい先程も任務を遂行させて参りましたので、その報告も兼ねさせて頂きます」

……？ 命令？

俺はもちろん、姉さんもずっと一緒にいたから命令なんて出してないよな。

「ねえ、俺、命令なんて出してないけど……姉さんは？」

「私も知らんよー」

シグナムさんが怪訝な表情で俺達を交互に見やる。そんな目で見られても、俺達にも知らないんだけどな……。

「……？ グリコのポーズで交番の周りを全力ダツシユしてこいというご命令があったとシヤマルから聞いていたのですが……」

「」
言葉を失った。

待て、冷静になって考えてみよう。

何？ シグナムさんがグリコ？ はは、有り得ないだろ。まだ知り合ってそんなに経つわけじゃないけど、この厳格そうな人が？ うん、ないない。

「……もしや、お二人のご命令では無かった……？ おのれ！ 騙したなシヤマル！！ よくも私にあんな恥知らずなマネを……！ 少し楽しかったではないかッ!!」

「少し楽しかったんですか!?!」

グリコしたことよりそっちの方が大問題なんですけど。恥知らずなマネと言いつつ再犯する気まんまんじゃねえか。命令を遂行しても守りきれてねえよ騎士の誇り。

というかよく信じたなそんなん。いつの間にかやって来たんだよ？ よく捕まらなかったな。

「ま、まあ、シグナムさんが忠実な騎士さんだつてことはよく分かったよ。これからもよ

ろしくお願いしますね」

「はい。ご希望とあらば例え水上だろうが、ホワイトハウスだろうがグリコで走りきつて見せます」

そんな期待は誰もしてないよ。国際問題になるわ。しかもグリコめっちゃ気に入ってんじゃねえか。もういいよ、次、次に期待だ。

「では、エントリーナンバー三番、ヴィータちゃん。どうぞ」

3番手は俺達よりも更に年下なんじゃないかというオレンジの髪の女の子だった。

今までの2人が好意的？ だった為か、少し機嫌が悪そうに見えるのは気のせいかな。

「……鉄槌の騎士、ヴィータ。……あんまじろじろ見んなよ」

「……あ、うん、ごめんね。騎士ってこんな小さい子までやってるのかって思って」

「……別に小さくねーです」

「そ、そうだね。あ、そうだ。ヴィータちゃんは一体どんなことができるのかな？」

「呼吸」

……か、会話が続かない。

な、なんだろう、めっちゃ警戒されてないか俺。

いや、俺だけじゃない……この子、主の姉さんにまでちよつと敵対心出してないか？

やっぱり、こんな小さい子が騎士なんてのは相当ストレスを感じるものなんだろうか。もしそうなら……この子にとつて俺たちは自分を縛り付ける鎖みたいな物なのかもしれない。あまり良い感情が湧かないのも当然か。

「お互いに突然のことで戸惑うかもしれないけど、できれば家族として仲良くして行きたいな。よろしくね、ヴィータちゃん」

ヴィータちゃんに握手を求めて手を差し出す。ヴィータちゃんはその手を不思議そうに見つめて、しばらくしてからおずおずといった様子で握り返してくれた。

「よ、よろしく、お願いします……」

「うん、こちらこそ」

まだ手探りの状態だけど、少しずつ仲良く慣れたらいいな。

今回ばかりは、素直にそう思った。

「では最後はエントリーナンバー4、シヤマルさん、お願いします」

「はい！ 湖の騎士、シヤマルです。趣味はお料理と、お裁縫、あとは……読書かしら」
シヤマルさんはおっとりとした感じの優しいような女の人だった。

家庭的な趣味に、知的な雰囲気を感じさせる佇まいは流石は騎士って言うだけあって、非の付け所がない。

……ん？ でもシヤマルって確か、シグナムさんに要らんことを吹き込んだ名前じゃなかったっけ？ いやいや、まさか。多分同名の別人だろう。どう見てもこの人そんなキャラじゃないじゃん。

「シヤマルさんは本が好きなんですか。姉さんと話が合いそうですね。ちなみに普段はどんな本を？」

「はい！ それはもう小さな少年少女がくんずほぐれつしてる薄い参考書を嗜んで——」

「不採用」

「そ、そんなご無体な！」

「ご無体じゃねえよ、常識に基づいた判断だよ。むしろなんで子供の前でロリシヨタ好きをカミングアウトして大丈夫だと思った？ 頭大丈夫か。ていうかシグナムさん炊きつけたのも確実にあんただろ。」

「そもそも、いつそんなものの情報を手に入れたんですか？」

「ネットって便利ですよ。なんでも知りたいことがワンタッチで分かるんですよ」

現代への適応早すぎだろ古代ベルカ。

「わっ、ワンチャン！ ワンチャンを希望します！ あっ、ザフィーラは座つてて。とにかくもう一度だけ私にチャンスをください!!」

自己紹介の段階で信頼を地に落としておきながら諦めてくれないよこの人。正直全く気が進まないけど、ここはもう一度機会を与えて、今度こそまともに自己紹介してくれるのを期待してみるか。

「……では、もう一度、どうぞ……」

「湖の騎士シヤマルです！ 私の子供が大好きで、毎日小学校の前を通る。それだけでもう私は生きる幸福をひしひしと噛みしめられます」

なんだらう……得体の知れない後悔に襲われた。

「なんか怖いんで、やっぱり不採用で……。とりあえず、今度物置小屋を買ってくるんで、寝泊まりはどうか、そちらで……」

「そんな!? 私に合法的にロリシヨタと同棲するチャンスのみすみす捨てろって言うんですかッ!?!」

知らねえよ、発狂するな。あと本人の前でロリシヨタとか言うな。シグナムさん、出番だぞ。騎士として俺達をこの変態から守っておくれ。

あ? いつの間にかシグナムさんいないじゃん。書き置きが……『ちよつと病院の前でカバディ踊ってきます』だと? そのまま入院してこい。

「フフフ、言っておきますけど、はやてちゃんと楓くんだつて余裕で私のストライクゾーンなんですよ? 今だつてこうして会話しながら二人でエッチな妄想しているんです

「からね？」

「したり顔で言うことか！ ザファイラー！ ザファイラー！！ 助けてー!!!」

「Yesロリシヨタ・Goタツチ」

その後、シヤマルさんと鬼ごっこをする羽目になったり、捕まったシグナムさんを警察まで迎えに行ったり、ヴィータちゃんと遊んだり、ザファイラーに慰めてもらって、騎士との共同生活一日目は終わりを告げた。

拝啓、天国のお父さん、お母さん。

今日、我が家に愉快的同居人が増えました。

バキボキ！八神家の楽しい家族旅行！ そのいち

騎士達が我が家に現れて、早くも1月が流れようとしていた。

最初はこのキテレッツな同居人に度肝を抜かれたけど、やっぱり人間って言うのは慣れる生き物で、一緒に暮らしはじめて二週間も立つ頃には彼女達への警戒心もすっかりと薄れていた。その代わり、シグナムの奇行を見張ったり、シャマルの暴走を食い止める別の警戒が必要になったけど……。

「シグナムー、ザファイーラー、そろそろ始まるよー」

そして俺はシグナムさん……もといシグナム達への敬称と敬語を止めた。本人たちの希望もあるけど、なによりこの人達に敬語は要らなくなって俺が思ったのが大きい。

「ああ、もうそんな時間でしたか。シャマル、チャンネルを回してくれ」

「はいはい、ただいま〜」

シャマルさんがリモコンでチャンネルを変えると、『動物発見！地球の仲間たち！』という番組タイトルがでかでかと表示される。元々はヴィータちゃんが見ていた動物番組だけど、釣られて我も、我もと見るうちにいつの間にか毎週家族揃ってこの番組を見るのが我が家の日課になっていた。

画面ではムリゴロウさんが子犬を撫で、犬も嬉しそうにムリゴロウさんにじゃれついている平和な映像が流れている。

『よおくし、よしよし。こうしてあげるとねえ、人間ってのは喜ぶんですよ。ちよろいですなえ〜』

「やめて! 変なアフレコつけないで!」

あんなに楽しそうに遊んでる犬がもう邪悪な存在にしか見えなくなつたじゃん。ムリゴロウさんかわいそうじゃん。もうあの犬を直視できねえよ。

何をとち狂つたのか、シグナムはたまにこうやって唐突なアフレコを始めるので、番組一つすら油断して見ることができない。最初にゴリラの映像を見ながら『ウホツホツホツエアツ!』と叫びながら唐突に立ち上がつてドラミングを始めた時は本気で心配したくらいだ。頭を。

『ウオウオ! この感触は……アオチビキですな! この子はすごいお魚さんなんですよ!』

「うおつ! さかなサンすげえ! 触つただけで種類当てやがつた! ……とところで、ずっと気になってたんだけど……さかなサンの下にいる奴って誰なんだ?」

「ヴィータちゃん……それが君の大好きなさかなサンなんだけど……」

「え、上のあいつじゃないの!」

さかなサンが目隠しをして、触っただけで魚の種類を当てるコーナーはヴィータちゃんのお気に入りだ。この子も出会った当初に比べれば大分態度は軟化していて、今じやまるで妹ができたみたいでかわいい。

やがて番組も終わってもしばらくCMまで見ているヴィータちゃん。どんなしようもないCMでも一々『はやて、楓、見てみて!』『おお!スゲエ!』と反応している。やっぱかわいい。

「ねえねえ、楓、これなに?」

「うん? どれ……って、ああ……」

それは国内でも有数のテーマパークことユニバーサル○タジオジャパンのCMだった。なんでも最近新しいアトラクションができて連日大入りだとかクラスのやつが話していたのを聞いた気がする。俺は行ったことないけど。

「これは遊園地だね。ヴィータちゃんは遊園地って知らなかった?」

「知らない。何するところなんだ?」

「そうだね……おつきな遊具を使ってみんなで遊ぶ、みたいな感じかな?」

本当は少し違うかもしれないけど、俺だって行ったことないから説明できん。

でも、ヴィータちゃんは俺の稚拙な説明でも満足してくれたようで、目をキラキラと輝かせていた。

「ヴィーたちちゃん……もしかして、行きたい?」

「行きたいッ!」

そう元気一杯に返事されると連れて行ってあげたくなるけど、こればかりは流石に俺が一人で決めていいことじゃないし……。一度姉さんにも相談してみよう。

「……行こか、遊園地」

「……え?」

「行けるの!?!」

……まじか。姉さん思い切り良すぎるだろ。

「……うん、決めた! 今までは保護者もおらんかったから楓を連れて行つたげること
もできへんかったけど……今はみんながおる! なあ、みんなは遊園地行きたい?」

「それが主のお望みとあらば」

「シグナムに同じく」

「いいですね遊園地! そこら中に小さい男の子や女の子が溢れているじゃないですか
!」

うん、要らなかつたね後半部分。遊園地に行く動機としてはおそらく最低の部類に入
ると思います。

そんなこんなで、唐突に決まった家族旅行は、善は急げということで翌日には決行される予定になっていた。

土曜日の朝から日曜日の夜にかけての小規模な旅行だけど、初めての家族旅行ということで、みんなでワイワイ言いながら準備をするのは予想以上に楽しかった。修学旅行は行く前が一番楽しいって言うのはよく言ったものだな。これ家族旅行だけだ。

遊園地にはまずはバスで駅に向かい、そこから新幹線を使って到着する算段だ。シャルの転送魔法っていう手もあったけど、せっかくの旅行でそれは味気ないってものだ。みんなで電車の旅って言うのも乙なものだろう。

「みんなー、忘れ物とかないー?」

「ハンカチ、お金、ティッシュ、携帯……うん、俺は大丈夫だよ」

「あたしらは元々荷物とかあんまりないし……」

出発前に姉さんが確認を取る。姉さんってこういうところがやっぱりお母さんだよな。

「ああ、忘れ物といえど一つ伝え忘れていたことが……」

「どうしたの、シグナム? 何か問題でもあったの?」

「ええ、実は先程お部屋にお迎えにあがった際に、ベッドの下でご令弟の下着を恍惚の表情で握りしめていた少女が……」

「それは忘れて。質の悪い妖怪だから」

今更、どうやって侵入したの? なんて聞かない。

なんかもう最近じゃその位のことので一々驚かなくなってきたわ。慣れって怖いね。

「な、なんやよう分からんけど、とにかくどきどき! 八神家の初旅行にいざ出陣や!」

『おー!』

バスに揺られること約30分、俺たちは既に新幹線の中にいた。

予定よりも少し早くついたので、席に座って雑談に興じている最中だ。

「新幹線って初めてだからなんか妙に緊張するかも……。みんなは新幹線って乗ったことあるの?」

「いえ、我らにとっても初めての経験です。普段は長距離の移動は魔法を使用していますからね」

「うふふ、楓くんの初めて……。これはイける」

「そもそも我らは闇の書と共に数年、あるいは数十年をかけて転生を繰り返す身である故に、近代のテクノロジーには疎いのです」

「え、そうなん?」

やべ、思わず素で関西弁が出た。

ザフィーラの話が本当なら3人はともかく、妹だと思っていたヴィータちゃんまで年上って事か？　なんてこつたい。

「前はたしか11年くらい前だったな……。そういえばエイリアンとプレデターってまだ喧嘩してんの？」

「一応完結したよ。というか意外とニツチなこと知ってるんだね……」

11年前に一体どんな生活してたんだよヴィータちゃん……。

「新幹線の発車まではもう少し時間あるみたいですね……。ヴィータちゃん、もしおなか減ってたら今の内に何か買ってきた方がいいわよ」

「あたしは別に大丈夫。シグナムは？」

「私は駅弁とやらが気になるな。出発前に買ってくるとしよう。主は如何ですか？」

「じゃあサンドイッチでも頼もかな。おおきにな、シグナム」

「いえ、騎士として当然の務めです」

普段こうしてる分にはシグナムも普通にかっこいいのにな……。どうしてあんなった？

戦犯、シャマルをジト目で睨んでみたが、悦ばれるだけだった。悶えるな変態。

そして、シグナムが無事に駅弁を買い終えてこつちに向かつて歩みを進めている時

に、それは起きた――

『ドア、閉まります』

――え、まだシグナム戻ってきてない。

シグナムも異常を察したのか、走ってこっちへと向かっていったけど、ドアが閉まるまでの数秒までには間に合わず、皮肉にもシグナムの目の前でドアは完全に閉じた。

『あつ』

「あつ」

「あつ」

シグナム、シャマル、俺がそれぞれマヌケな声を洩らす。

そして無常にも新幹線は発車し、棒立ちのシグナムの姿は横にスライドして消えていった――。

「大変です! シグナムが新幹線に乗り遅れました!」

「いや待て! 窓の外を見ろ! 走って追いかけてきているぞ!!」

「しかもよく見たらグリコのポーズしてんぞあいつ!」

意外と平気じゃねえか。バケモノか。

「ええとお……お、ここ通話OKなんやね。ちよつと待っててな」

「姉さん、電話なんてかけてる場合じゃ……!」

「えいつ」

言いかけたところで人差し指で唇にピトリと触れられて、最後まで言い切ることが出来なかった。

プルル、プルルとコール音だけが周囲にこだまする。

「あつ、シグナムく？ 悪いねんけどな、そのまま目的地まで頑張れる？ 私らも駅の出

口で待つてるからな」

『御意に』

「相手シグナムかよ!?!」

この状況で電話する姉さんも姉さんだけど、出る余裕があるシグナムさんは本当に何者なんだよ。

「——ふう、なかなか良い運動になりました」

「お疲れく、シグナム。ポカリあるけど飲む？」

「いただきます」

マジで遊園地まで走ってきやがったよ……しかもほぼ並走で。

明らかにポカリでどうにかなる運動量じゃなかっただろアレ。ここまで正面から常識に喧嘩売られると僕ももうどうしていいか分かんない。

「いや、正直自分でも驚きです。この旅が終わったら『魔法騎士 フィジカル☆シグナム』を始めようかと思えます」

「なあ、ザファイーラ。あんたアレ真似できる……?」

「無茶を言うな。俺は奴とは違つて常識の枠内で生きているんだ。本格的なバカの力を開眼させた奴と一緒にするな」

「姉さん、俺、この年でター○ネーターに追いかけるジョン・コナーの気持ちが分かるとは思わなかったよ……」

「なんで俺たち、初の遊園地入場の瞬間にこんな奇妙な気持ちになつてるんだろう……。」

うん、気持ち切り替えよう。

わー、遊園地つて広いなー。結構込んでるもんなんだなー。

「……せつかくだし、早速何かに乗ろうか。あのオジヨーズつてアトラクションが比較的空いてるみたいだね……げっ、それでも90分待ちか」

流石は日本有数の遊園地、待ち時間も半端じゃないな。

「シグナム。はやてちゃんからの命令よ。」

オジョーズに並んでいる客全員を古代ベルカカラテで振じ伏せてらっしゃい」
「御意」

「御意じゃないよ!!」 シャマルも姉さんをダシにとんでもないことさせないですよ!!」

その後、ちゃんと90分待つて俺たちは無事にオジョーズに乗ることが出来ていた。乗り物のサイズの都合上、全員で一行になることはできなかった。前列にザフィーラ、俺、姉さん、ヴィータちゃんの順で並び、後列にはシグナムとシャマル行つて貰うことになった。シャマルはロリシヨタに挟まれない遊園地なんて、とかぼやいてたけど知らん。

なんでも船に乗つて、映画『オジョーズ』の舞台を回るアトラクションらしいけど……それ以上のことは俺も知らなかった。前に同乗してる職員のお姉さんの解説を待つことにしよう。

『本日は当遊園地へようこそいらつしやいました！今日はアトラクション・オジョーズを楽しんでいってください！ところで皆さんご存知ですか？実はこの海には昔、オジョーズという凶暴な人食いザメが出ていたんですよ』

えっ、まじで？なにそれ怖い。

『もちろん、今はサメなんて出てきませんのでご安心ください！それでは私と海の旅を楽しみましょう』

そういうなら最初からサメの話するなよ。こっちは内心ガクブルだわ。

横を見ると、ヴィータちゃんも怯えた様子で姉さんの服の裾を掴んでいた。

「は、はやてえく……サ、サメ出ないよな? 本当に出ないよな?」

「おー、よしよし大丈夫やで、ヴィータ。サメなんか出てきてもシグ……ザフィーラが倒してくれるからな」

「主?! 今誰か別の名前を言いかけて止めませんでしたか!？」

自業自得、日ごろの行いのせいだと思うよ。さりげに重大責任押し付けられたザフィーラには可哀想だけど。

「でもザフィーラなら本当に——」

【オジョオオオオオオオオオオオズ!!!】

——かてるかも……あ?

『わっ! み、みなさん! サメです! 大きなサメがこっちに!!』

「はやてー! はやてー!!」

「大丈夫やでー、ヴィータ。私はちゃんとここにおるよ。さあ、楓もカモン」

「ザフィーラー! ザフィーラーアア!!」

「俺に来るのか……」

「あつ、ザフィーラずるい!! 私も楓に抱きつかれたい!」

「それ私も同席していいですか? 出来ればサンドイッチでお願いします」

「おのれオジヨーズめ! レヴァンティンの錆びにしてくれる! くっ……安全っ、バーがつ……動けん!」

なんで俺とヴィータちゃん以外は動じてないんだよ? サメだぞ、サメ!

シグナムは相変わらずなんかおかしい方向にぶっ飛んでるけど。

しばらく安全バーと格闘した後、外れないと悟ったのかシグナムは大きく目を見開いて叫んだ。

「オジヨオオオオズ! 主とご令弟には手を出すな! 食べるならシヤマルからにしろ

! 一番被害が少ないツ!!」

「ちよつとそれどういことよ!? 貴重な色気担当を殺す気!」

「ええい、昔からサメの餌は金髪の女と決まっているのだ! 守護騎士としての務めを全うして逝け!」

だからそういう情報つてどつから仕入れてるんだよ。あとシヤマルさんは完全にネタ担当だよ。

シヤマルがまさに生け贄に捧げられようとしたその時、なんと職員のお姉さんが果敢

にもオジヨーズに向かって船に備え付けられていたライフルで応戦をはじめ、しかも勝利してしまっていた。お姉さんすげえ。

「いいぞお姉さん!」

「燃やせ! 燃やせえっ!」

でもなんだろう、死に行くオジヨーズに必死に野次を飛ばす後列の大人2人を見てみると争うということの虚しさがひしひしと伝わってきたわ。というかそれでいいのか守護騎士?

ちなみに後で姉さんにオジヨーズの正体を作り物だったと聞いて少し恥ずかしくなったけど、もつと恥ずかしい大人が2人いてくれたおかげで黒歴史にならずに済みました。

バキボキ！八神家の楽しい家族旅行！ そのにつ

オジヨーズとの戦いを終え、俺たちは現在、土産物屋の中を見て回っていた。ちょうどオジヨーズのアトラクションを出てすぐのところであり、後から回るのも時間がとられるので今の内に見ておこうという計画だ。

「お土産屋コーナーかあ……そもそも誰に何を買うか……」

うーん……自分用に何か買うのと、一応バニングスさんと月村さんあたりにも何か買っておいいた方がいいかな？ そもそも、お土産買う相手なんてあの2人くらいしか当てがないし。

「はあー……こうやって見てみると、いろいろあるもんやねえ。……あつ、見て見て！ これかわいい！」

そう言つて姉さんが手に取つたのは白いネコミミのついたカチューシャだった。一瞬、なんでそんなもんがここに？ って思ったけど、よく見たらあれ、ボンジュールキティの耳だ。確か遊園地とタイアップしてるんだっけ？

姉さんはそのままヴィータちゃんを手招きして呼ぶと、その頭に白のネコミミをちょこんと乗せるのだった。姉さんグツジョブ。

「楓、楓! はやてがこれ着けてくれた!」

「うん、似合ってるよヴィータちゃん」

「ほんと?! じゃあ楓とはやてにも着けてあげる!」

ヴィータちゃんがあの子なりのダツシユでとてと商品棚から追加で二つネコミを持ってきて、俺達に差し出してくる。なんでこの子一々こんなにかわいいの?

ヴィータちゃんにここまでやらせておいて着けないなんて選択肢はももちろんありえないので、姉さんとヴィータちゃん、3人で仲良く別色のネコミミを着けることに。ネコミミっていうのが少し恥ずかしいけど、ヴィータちゃんが喜んでくれているのでよしよししよう。

「シグナム、理想郷はここにあったわ」

「お前の理想は税込980円なのか……」

シヤマルが相変わらずなんか変な事を言ってたけど、今はヴィータちゃんのを堪能しているので無視しておく。ヴィータちゃんがこんな嬉しそうにしてるとこつちまで笑顔になってくる。

でも、不意にその表情が軽く曇ったかと思うと体をもじもじさせて、恥ずかしそな表情で俺に耳打ちをした。どうしたんだろう?

「……あ、あのさ、ちよつとトイレ……」

……ああ、なるほど、そういうことか。

興奮して急に催すつて言うのはヴィータちゃんぐらいの年の子には良くあることだ。まあ実年齢は知らないけど。

「あーつと、トイレは……あっちの方だね」

「私が連れて行こか？」

「いや、混んでるし俺が連れていくよ。姉さんはみんなの事を見張つてて」

誰とは言わないけど約2名、放つておいたら子供を追い掛け回したり店内でカバディ踊りだす奴いるし。

「あー……あと、商品持ったままだと不味いから、それはどこかに置いて行こうか」

「分かったー！」

ヴィータちゃんはハンドサインでザフィーラを屈ませると、その頭にそつとネコミミを置いた。え、わざわざそこに置く？

「普段のイヌミミで見慣れてると思つてたけど、ネコミミになると何と言いますか……」

「これはまた予想を軽く越える気色悪さだな」

「ぎ、ザフィーラをバカにしないで！ ザフィーラなんも悪くないから!!」

「……………」

なんも悪くは無い……んだけど……ごめん、やつぱ今だけはこっち見ないで。

その後、無事にヴィータをトイレまで送り届け、バニングスさん達へのお土産に遊園地のロゴの入ったお菓子を、自分用には3人でお揃いの携帯ストラップを買っておい

た。
あと、なぜかファイラの頭に設置されたままのネコミミも買うことになった。

店を出た所で辺りを見回すと、一部でちよつとした違和感を感じた。混んでいる中でもそこだけ特に人だかりができてるような……なんだ、有名人でも来てるのかな？

横を見てみると、シヤマルもそわそわと落ち着きの無い様子で人だかりを見つめていた。意外とこういうのが気になるタイプなのか。

「あのお、少し見ていきませんか？」

「え〜！ そんなのどうだっていいだろ。それより早く次の乗り物だろ！」

「まあまあ、ヴィータちゃん。今日だけじゃなくて明日もあるんだし、ゆつくり楽しもう？」

正直、俺も少し気になるのが本音だ。

ヴィータちゃんには悪いけど、今回だけはシヤマルの援護をさせてもらおうことにしよう

う。

ヴィータちゃんはなおも不満そうな声を上げていたけど、しばらく人だかりと俺を交互に見ながら

「……楓がそう言うなら……分かった」

としぶしぶながらに納得してくれた。

ヴィータちゃんのお許しも貰った所で、人だかりを覗き込んでみるとその中心にはマイクを持った人の良さそうなお兄さんと、家では使わないような大きなカメラ、そしてお兄さんにマイクを向けられて笑顔で話す子供の姿があった。

あれってテレビでよく見るインタビュってやつだよな。やっぱり日本有数の遊園地ともなるとそういうのも来るんだな。

「わっテレビや！ テレビ！ すごい！私、テレビってテレビでしか見たことないんですよ！」

「興奮してるのは何となくわかるけど落ち着いて。何が言いたいのか訳わからなくなってるから」

姉さんの声に気付いたのか、マイクを持ったレポーターのお兄さんがが微笑ましいものでも見るような表情で姉さんにマイクを向ける。

「すいません、インタビュよろしいでしょうか？」

「えっ、わ、私ですか?! はい、もちろんオツケーです!」

おお、姉さんがテンパってるのなんて始めて見た。テレビ好きだもんね、姉さん。これもいい思い出の一つになってくれるといいな。

「今日はどちらから来られたんですか?」

「はい、家族と海鳴市から来ました!」

「おお! それはまた随分と遠い所からいらしたんですね! 新幹線でしょうか?」

「いえ、徒歩です」

「は……?」

「それはシグナムだけでしょ! ほらこっち来て! インタビューの邪魔しない!」

「あっ……」

離されてなおアナウンサーを……いや、カメラをガン見しているシグナムに圧されたのかは分からないが、レポーターさんそのままこっちにもマイクを向けてくれた。人の優しさに触れた瞬間だった。

「え、ええと、それではご家族の話も伺ってみましょう。あの——」

「全国のテレビの前のロリシヨタのみんな、こんにちは。貴方のお姉さんのシャマルです。そしてロリシヨタでない貴方。貴方に用はありません。すぐにチャンネルを変えなさい」

「こらっ、マイク奪わない!」

ぺしっ、とシヤマルの頭を軽くチョップすると、なぜか嬉しそうな表情をする。変態の業は深い。

シヤマルが奪ったマイクを返すと、レポーターさんは苦笑いを浮かべながらも許してくれた。もうなんか本当にすいません。

「えー、それではそちらの貴方は今回の……貴方は何をなさっているのでしょうか?」

「ん? ああ、失礼。さつきから少し暇をもて余していたのでな、知らない中学生の集団に紛れ込んで仕切っていた」

「貴方は一体なにをやってるんですか!?!」

「無論、未来ある若者の青春の一頁に私の存在を刻み込んでいる」

貴方は一体なにをやっているんですか……?」

「おい」

「はい! 今度は何で——」

そしてレポーターさんの背後から現れるボンジュールキティというには男らしすぎる筋骨隆々のネコミミ男——。

「」

「疑問なのだが、俺はこの姿でテレビに出ても大丈夫なのだろうか?」

「あー……もういいんじゃないですかね? それで。つかもう好きにせーや」

「適当ツ!? どうすんのみんな! 完全にレポーターさんの心折れちゃたじゃん!!」

「はっ、軟弱な」

後にこのインタビュー映像が動画サイトにアップされ、伝説の一家と呼ばれていたことを俺が知ったのは後の話だった。

その後、逃げるようにして近くのうどん屋に駆け込んで昼食を食べる羽目になっていった。遊園地にまで来て来て何してるんだらう俺たち……?

ちなみにザフィーラのネコミミはヴィータちゃんに移しておいた。完全にすれ違う人みんな怯えてたもん。

「ね、ねえヴィータちゃん……。そのままニヤンって言ってみてくれない? ね? 一

回だけでいいから。ほら、お姉さんがお菓子買ってあげるわよ? だから……ね?」

「きめえんだよ、こつち見んな」

ヴィータちゃんが席に備え付けられていた練りカラシを手に取り、シヤマルの目をピンポイントに狙って迷うことなく発射する。次の瞬間、シヤマルはありがとうごさいま

すっ！ と叫びながらのたうち回る羽目になっていた。君って敵と見なした人間には結構容赦ないよね。今ほどヴィータちゃんとの関係を改善できて良かったと思っただけの間は無だよ……。

「……シヤマルよ」

ザフィーラがシヤマルを見つめて……いや、睨んでるのか？

あんだだけ変態炸裂させりやそりや怒られるわ。やってやれザフィーラ。

「……にゃん」

「ザフィーラ!？」

「ゴッフエエエー!!」

「わっ、きつたねえ!! 鼻からうどん吹くなよ!!」

目から練りカラシを垂れ流し、鼻からうどんをこぼすシヤマルさんの絵面のなんと酷いことか。これ写メつとけば後々の切り札に使えるかな？

「というか、こう言っちゃなんだけど、シヤマルは喋るだけで好感度下げていくんだから、もうずつと黙ってればいいのに……」

「ふふふ、本当にそれ言っちゃったら終わりですわ楓くん。でも大丈夫ですよ、私くらいのレベルになるとロリシヨタからの蔑視の視線は快感へと昇華されるんですよ」

「ごめん、ちよつと本気で気持ち悪い」

「そうです、それです。楓くんも分かってますね」

シヤマルのなんとも嬉しくない新たな一面を発見した昼食だった。

昼飯を食べ終われば今度こそ遊ぼうというヴィータちゃんの希望の元、俺たちはジェットコースターの列に並ぶことになっていた。もつとも、ジェットコースターとは言っても大きなものじゃなく、室内で行われる比較的小規模なものだけ。

本当は大きいのに乗っても良かったんだけど……ほら、ヴィータちゃんの伸長制限が……ねえ。

「にしてもジェットコースターか……オジヨーズとはまた違った怖さがあるよね。姉さんはこういうのは平気なタイプなんだっけ？」

「ふふつ、楓は怖がりさんやなあ。お姉ちゃんはこんなんじゃ……ん？」

「(ちよいまち、ここで私が怖がれば、楓は多分じゃあ隣に座ろうか姉さんって言ってくれるはず。そんなでもって、きゃー落ちるの怖いわ楓ーからの自然な抱き付き……これはいける!!)」

「かえ——!」

「楓ー、一緒に座ろー」

「うん、いいよヴィータちゃん。あ、姉さんなんか言った？」

「……うん、何も無いもん。泣かへんもん……」

なんかよく分からんけど、もう順番来たよ？

今度は基本的に2人ずつしか座れないので、俺とヴィータちゃん、姉さんとザフィラ、そして変わらずシャマルとシグナムの組み合わせで乗ることになっていた。

この2人は基本的に一緒にしておけばお互いに潰し合ってくれるから周りの被害が少なくて済むしね。

そして、いざ、搭乗の時、今までに無いくらい心臓がドキドキしているのが分かった。こういうのって出発する前が一番緊張するって言うけど、本当だったんだな……。

いつそのこととおもいに早く出発して欲しいと思う中、後ろから不意に肩を叩かれる感触があった。シグナムだ。

「……ご令弟、ひとつ、聞いていただきたいことがあります」

「え、よりよって今？ それって後じゃ駄目なの？」

「いえ、そういう訳ではないのですが……是非とも貴方には聞いていただきたいのです。私の……覚悟を」

「覚悟……」

シグナムの目は迷うこと無くこつちをまつすぐに見据えていた。

いつになく真剣な雰囲気や漂わせるシグナムに俺も口を挟むことができず、ただその先に続く言葉を待つことしか出来ない。

「私は先程のオジョーズとの戦いで、安全バーに屈し、身動き一つとることが出来ませんでした。もしあのお姉さんがいなければ……そう考えると、背筋が凍る思いです。まさに騎士としてあるまじき失態……」

シグナムの表情は俯いていてよく見えなかったけど、小刻みに震えている肩がまるでシグナムの悔しさを代弁しているみたいで――

「ならばせめて、今度はオジョーズだろうがゴツジイラが現れようがお二人を守り抜いてみせる! 故にッ! 私は安全バーを下げないッ!」

「馬鹿じゃねえの!?!」

かっこいい顔と雰囲気だなに私はアホですと宣言してんだこの人。

急いでシグナムの安全バーを下ろそうと手を伸ばすものの、無慈悲にも発車してしまうジェットコースター。

そして高速回転しながら宙を舞うシグナム。

その後のことは……あまりに凄惨過ぎて語りたくない。一つ言えるのは、ジェットコースターが帰ってくるまでの約10分は、多分シグナムにとっては今までの人生の中

で最も人としての尊厳が踏みにじられた10分だったろうということだけだ。

「シグナムー! シグナムウー!」

置物のように動かなくなったシグナムに全員で駆け寄る。

普段から大概なことをやっているけど、今回は流石にヤバイんじゃないか。

「頭を打ってるわ! 動かさないで!」

「え、じゃあどうすんだよ!?! このまま埋めんの!?!」

——埋葬!?

「ちよつと待て、それは困る」

あ、復活した。

良かった、危うくこの遊園地に、不自然に盛り上がった土新たな七不思議が生まれるところだった……。

「本当に大丈夫かしら……シグナム、貴方の趣味は?」

「カバディと剣道。あとグリコのポーズ」

「貴方は私のことを影でなんて呼んでる?」

「妖怪カモンアグネス」

「GUPは何の略?」

「学校で奪ったパンツ」

「大丈夫そうです！」

いや、駄目だろ。

そんなこんなで、八神家初遊園地、一日目終了——

バキボキ！八神家の楽しい家族旅行！ ふあいなるっ

「待つて！ 無理！ さすがに今回は無理だから！」

「なんでそんなこと言うん!? 家族水入らずで入ればええやないのー！」

「あのね、姉さん？ 姉さんだけならまだしも、他のお客さんもいるんだよ？ めっちゃ水入ってるじゃん！ 大洪水じゃん!!」

「そんなことはええから行くよっ!!」

姉さんが力強く手を引つ張つて俺を赤い暖簾……『女湯』へと引きずり込もうとして、俺はそれに抵抗する。

俺たちはもう20分もこんな茶番を続けていた。ことの発端は、遊園地を出た後に、あらかじめ予約していた遊園地の近くのホテルでみんなで団欒していた時まで遡る。

事の発端は誰かが不意に、風呂にでも入ろうかと言い出し、みんなで大浴場に向かうことになった……。そう、そこまでは良かったんだ。でも問題はその後、なぜか俺たちは温泉の前の『男』と『女』の鉄門より固い暖簾の前で言い争う羽目になっていた。

——いや、さすがに女湯は無理だろ——。

いくら普段から姉さんと風呂に入ってるとは言つても、外の……それも女湯に入ると

なれば話は別だ。そもそも姉さんと入るのも介護のためであつて、自発的に一緒に入つてゐるわけじゃない。というかそれをやりだしたら人として終わりだ。

「そ、そうだ。俺がそっちに行つたらザフィーラが一人になるじゃん!ねえ、ザフィーラ!」

「氣遣い、痛み入ります。ですが私のことは氣になさらず」

「よっ、ほっ、やつ!」

「違うんだザフィーラ、今欲しいのはその優しさじゃないんだ。むしろ氣遣いして欲しいのは俺の方なんだ」

「大丈夫ですよ、楓くん。楓くんははやてちゃんと似てかわいいお顔をしていますし、なによりまだ子供なんですから誰も氣にしませんよ」

「鼻息荒くして、手をわきわきさせながら言つても説得力ないんだよッ!」

「いいじゃん! あたしも楓と一緒にの方が楽しいと思うぞ! なあ、一緒に入ろうよ!」
「うっ……」

「ふっ、ハツハツハツ!!」

期待に満ちた目を爛々と輝かせるヴィータちゃんに、さつきまでみたいに強く否定することができなくなる。どうにも俺はヴィータちゃんにお願いされると弱いらしい。

「……分かった。でも今回だけだからね」

「っしやあつ!! キタアアアアアアアアアアアアツツ!!」
うるせえぞ変態二体。あとシグナムは男湯の前でタツプダンスするな。

脱衣所で服を脱いで、室内のお風呂へと入る。その際、せめてもの情けで、腰にタオルを巻くことだけは許してもらえた。言い争っていたおかげで時間が遅くなったからか中は比較のお客さんが少なく、それが唯一の救いだつた。もつとも、シヤマルやシグナムがいるだけで目のやり場には十分困るけど。

「よーし早速入ろーつと!!」

「あつ、待つてヴィータッチャん。先に体を洗わないとダメだよ」

「えー……そんなの後でもいいじゃん。一緒に入ろーよー」

「だーめ。ルールを守らないとあんな風になつちやうよ?」

俺が指差す方向では、まるでヘルメットのように頭に洗面器をすっぽりと被つたシグナムが極めて真剣な表情で石鹸を足に挽いてスケートごっこをしていた。お前風呂になにしに来たんだよ?

「あ、あれはちよつとヤだな……。分かつた……。ちやんと洗う……」

「うん、いい子、いい子。ほら、髪の毛洗ってあげるから座って」

「うん!」

「あつ私もー!予約二番な!」

「私は三番でお願いします!!」

「私は四番だね!!」

おい、待て。二人は言うてくるとは思ってたけど、四番は誰だよ。聞き覚えあつたぞ今の声。あと二人とも前を隠しなさい、前を。特にシャマルは直視できないから。

目をそらした先で、不意にどこかで見たような顔が視界に飛び込んできた。……よく見れば見覚えもあつて当然だった。だって毎日学校で顔を合わせているんだから。

「……バニングスさん?」

「あつ、やば」

なんでバニングスさんがここに?

というか、ここ温泉つてことは、は……だ……か……。

「き、きやああああああああつ!!」

「わあつ! 急に大声出すんじゃないわよ、びつくりするじゃない。もう……」

そう言つてバニングスさんは小ぶりの胸を隠すこともなく腕を組む。年相応で至つて普通の胸。ウエストは少し細いのもかもしれない。下半身は……とても直視できな

かった。

海外特有のブロンドの髪を覗けば至って普通の小学生の裸だ。うん。いや、でもそういうことじゃないんだ。別にバニングスさんが悪い訳じゃない。それは間違いない。俺が驚いているのはそんな事じゃない。

「な、なんでバニングスさんは平然としてるの!?早く隠してよ!というか何でここにいるの!？」

「何でつてここ女湯よ……。それとも、なんでこのホテルつて意味なら……。ぐ、偶然よ、偶然。私はあんたがここにいるなんて知らなかった……。というか女湯にいるなんて知りたくなかったわ」

「うん、それは本当にごめん……」

別に俺が望んだ訳じゃないんだけどなあ……。

そんなことを心の中で呟いていると、俺たちの話し声が聞こえたらしく、姉さんとシヤマルがこつちへとやって来ていた。ちなみにシグナムは湯船でバタフライの練習をしている。

「あれえ? アリサちゃんがおる。こんにちは〜」

「ええと……楓くんのお友達ですか?」

「いえ、はやての友達です。アリサ・バニングスと言います。よろしくお願いします」

果たして今の否定はする意味があったのかな。その辺り小一時間ほど問い詰めた。

「……………ん? ちよつと待つて。バニングスさんがいたってことは、月村さんもいるんじゃないの!? やばい! 早く脱衣所に戻らないと服が全部持つてかれるツ!!」

「……………いやー、さすがにそれはないでしょー。あんまり自意識過剰だと嫌われるわよ。もつとも、あんたに嫌われるほど人と関わり合いがあればの話だけだね。あと至近距離で大声出すの止めてくれない? ツバ飛んできて汚いんだけど」

それとなく俺には嫌ってくれる相手もないとデイスられたのはいいとして、この反応、確実にクロだ。まさか、旅行の最初から付いてきていたのかこの2人? なんにせよ、第一優先事項はその事じゃない。

「俺のパンツは?!」

脱衣所に戻ると、案の定パンツが1枚無くなっていた…………。

今日の教訓、月村さんを甘く見てはいけない。

「……………ん、……………ん……………」

妙な寝苦しさで、窓から差し込んでくる朝日の光で意識が覚醒していくのを感じる。

「あれ、俺、何でこんなところで寝てるんだっけ……う？」

まだ、少しだけ眠たい頭を必死に動かして昨日の出来事を思い出す。

「あーっと……昨日、風呂に入って、バニングスさんがいて……パンツ取られて……そう
だ、あの後枕投げしてそのまま寝たんだったっけ？」

とにかく、今が何時なのか確かめよう。右腕を動かそうとするが、不意にずっしりと
した重みを感じて、その腕が動くことはなかった。

「……姉さん？」

「うへへ……うへへ……すう」

……なんてこった、姉さんが俺の腕をがっちりホールドされてる。しかもよく見たら
左腕には同じようにヴィータちゃんが抱き付き、両足にはハアハアと荒い息を吐くシヤ
マルが纏わり付き、おまけに頭はザフィーラに膝枕されていた。

「……そりゃあ寝苦しいはずだよ。なにこれ？」

とりあえずこのままじゃ起きるに起きれないので、まずはシヤマルを蹴り落とし、足
だけで這いずるようにしてザフィーラ太股枕から脱出する。

次いでヴィータちゃんだけはできるだけ丁寧な、それはもうガラス細工に触れるが如
く丁寧に、決して起こさないように離す。あつ、ヴィータちゃん寝顔もかわいい。

最後は姉さんが、適当に振り回しや離れるだろ。ほれほれ。

……などとアホなことをやってたら思い切り腕をギョツと捕まれた。

「……姉さん、実は起きてるでしょ?」

「あ、バレた? いやあ、それにしても昨日は楽しかったなあ」

「……それは旅行そのものの話をしてるの? それともホテルの他のお客さんやスタッフまで巻き込んだシグナム主宰の『アルティメット枕投げ大会』のことを言ってるの?」

「もちろん両方やで」

「おはようございます、お二人とも。体の疲れは癒えましたか?」

押し入れからシグナムから顔を出す。ドラえもんかお前は。

やがて、シグナムの声に釣られるように、他のヴォルケンズも次々と目を覚ましていった。

「ああ、おはようございます……。あら? ちょっとザフィーラ。貴方がそこにいると私のロリンシヨタ王国に染みができるわ。ちよつとあつちへ行ってくれない?」

「お前は朝一の挨拶がそれなのか……」

「まあ、シヤマルがおかしいのはいつものことだけど、実際ザフィーラってなんか浮いてるよな」

「ねー? 一人だけ男だし……」

「あとは一人だけ名前が5文字だしな」

「ここに来て名前イジリだと……!？」

お前達はもはやヴォルケンリッターでもなんでもない!ただのジャイアンだツ!!

聞け!我らヴォルケンリッターの使命は主の命令を遂行するだけではなく、我々の団

結と——」

「おいおい、なんか語りだしたぞコイツ」

「きつと眠くてイライラしているのよ、そつとしておいて上げましょう?」

なぜだろう、今のザフィーラからは妙な哀れみと同時にシンパシーを感じる……具体的にバニングスさんと居る時の俺に近い何かを……。というか、名前は別になりたくてなったわけじゃないだろ。許してやれよ。

「……あと、姉さんはいつまでくつついてるの。早く離してくんない?」

「いゝやつ」

—— pipipi, pipipi

「電話? 誰の? ……つて、俺のだ。誰にも番号は教えてないのに何故だ……?」

「おう、しれつとお姉ちゃんが悲しくなること言うのやめーや」

ディスプレイを覗くと、登録した覚えの無い番号と、笑顔でこつちにサムズダウンを

決め込むバニングスさんと、見覚えのあるパンツを片手に狂乱している月村さんの画像が写っていた。

『楓くん、こんにちは!いや、まだおはようの時間かな?遊園地、楽しんでる?』

「うん。登録した覚えの無い番号から教えた覚えの無い俺の予定が語られている事実に戦慄した以外は概ね楽しんでるよ」

『そっか! よかった! 楓くんが楽しんでるならそれが何よりだよ!』

そうですか、前半は完全に無視ですか。

今確信した。この人の耳はきつと自分にとつて都合のいい事実しか聞こえないようにできているんだ。やっただ、ついに月村さんの謎がひとつ解明されたぞ。クソがッ! 「……もういいや。で、どうしたの月村さん?こんな時間から電話くれたってことは何か用事があったんだよね?」

「あつ、そうだった! ごめんね、楓くんとお話するのが楽しくてつい忘れちゃったよ。実はね——」

月村さんの口から語られたのは、俺の想像を軽く越えるような、とんでもない言葉だった。

『今日楓くんが行く遊園地には、楓くんが私の次に大好きなスパイダーマソのアトラクションもあるんだよ?』

——スパイダーマソのアトラクションもあるんだよ?』

「うーひよひよあひやおふえあひよおっ!!」

「おい!? ご令弟が嬉しさのあまり気持ち悪い笑いかたをなさられているぞ?」

「だってスパイデイだよ!スパイデイ!」

月村さんからとんでもない垂涎ものの情報をもらった俺たちは朝一で遊園地に再入場して、一も二も無くスパイダーマソのアトラクションにやって来ていた。

「ご令弟。ヴィータの身長制限が危ないなどのたまうキグルミがいたので、しばいて衣装を奪っておいたのですが、問題なかったでしょうか?」

「ナイスシグナム! そのキグルミ貸して! 俺が着るわ!」

「楓くんがツツコミを放棄した!」

「あー、あの子は昔っからそういうの好きやったんよ。やから思わぬところでこんな出合いがあつてテンションがフォルテツシモに……」

外野が何か言っているが、今の俺には聞こえないね。だってキグルミだから!

「楓、楓。そもそもスパイダーマソってなんなの?」

「あ、聞きたい? ちょっと長くなるけどいい? それじゃ話すよ? スパイデイはね

それから、俺も姉さんも遊び疲れて眠ってしまっただけでひたすら遊園地を楽しんだ。

スパイダーマソに8回くらい乗ったり、シグナムがオジヨーズにリベンジを挑んだり、シャマルがザフィーラにネコミミを着けたり、ザフィーラが職質されたり、ヴィータちゃんが身長制限表を破壊したりと、一言では語りきれないくらいの思い出ができた。

それにしても……遊び疲れて眠るなんて、多分生まれて始めての経験だ。

……今だから言うと、俺はあまりヴォルケンリッターのみんなを最初は快く思っていなかった。いきなり現れて、家族が増えて、個性が強すぎて――

でも、いつからだろう。そんなみんながいてくれるのが楽しいと感じるようになったのは。今なら自信を持って言える、この人たちは……ヴォルケンリッターは八神家の家族だって。

だから――

「お二人はお疲れだ。私は主を運ぶ。ザファイーラは車椅子を頼む。シャマルは……くぐれも無礼の無いようご令弟の方を頼む」

「ええ、任せて。騎士の誇りに懸けて……ね」

失いかける意識の中で聞こえてきたそんな声に、今だけは身を任せてもいいと思えた。

おまけ

もうひとつの旅行

土曜日 PM 2:00

「それにしてもどうしたのよすずか？ いきなり遊園地行こうだなんて……」

「いいからいいから！ それにしても、今日は暑いね」

「あらずか、そんなハンカチ持ってたかしら？」

「あ、これ？ これはこの前遊びに行った時に楓くんが貸してくれたんだ」

「へえー、なんかあいつがこの前無くしたのに似てるけど、どうせあいつのことだから貸したことも忘れてアホみたいに騒いでたんでしょね」

土曜日 PM 8:30

「見て見て! アリサちゃん! 楓くんがお風呂に……!」

「いるわねえ。何であいつ女湯に入ってるのかしら?」

「あつ、楓くんが女の子の髪の毛洗ってあげてるよ!」

私もあれやつてもらえるのかな!?!はやてちゃんが二番で、あのお姉さんが三番ってことは……私は四番だね!!」

すずかはハツと何かに気づいたように目を見開いた。

「ね、ねえアリサちゃん、このままで私が入ってるお湯に楓くんが入ることになるよね……それつてもう、私と楓くんが結ばれたと言つても過言じゃないよね!?!私たちはもう他人の関係じゃないって解釈してもいいのかな!?!かな!?!」

「あー、いいんじゃない?それで。あつ、でもその理屈だと同じ湯にいる私まで巻き添えね……。そうなる前に早く出ちゃおつと」

日曜日 AM 10:00

「ははっ、見てすずか。あのポニーテールのお姉さん、美人な癖にキグルミに襲いかかって衣装を奪ってるわよ。遊園地だからってテンション上がりすぎでしょ」

日曜日PM5:00

「遊園地楽しかったね、アリサちゃん」

「ええ。ところですか、素朴な疑問なんですけど、スパイダーマソに8回乗る意味はあったの……?」

「あつ、楓くん疲れて眠っちゃってる。あのお姉さん、楓くんを抱っこできていいなあ……」

「抱っこ……? 私にはどう見てもなぜか体の向きが逆な風車にしか見えないんですけど……」

「顔中に楓くんを感じられるなんて……ずるいよっ!」

「……そうね、残念だったわね。」

それと、懐からさも当然のように取り出した男物のパンツで涙を拭うすずかをそれでも私は親友だと信じているわ」

チャリできた。補助輪付きだけど

まだ日も沈みきらない時間の、近所の商店街。

ヴィータは八角形の木製の箱にハンドルがついた、一般に『ガラガラ』などと呼ばれる抽選器の前に立っていた。

商店街で1000円以上買い物をするともらえる福引券。それを10枚集めると、クジを一回引くことができるのだ。

景品は合計で7種類あり、一等の温泉旅行などというものから、残念賞のポケットティッシュまで幅広いものが用意されていた。

おぼつかない動作でハンドルに手を伸ばし、ゆっくりとそれを回していくと、その名の通りガラガラと音を立て始める。不意に、ヴィータはその音に鼓動が高鳴るのを感じた。

「ようし、行け、ヴィータ。……ほら、どうした？ もつと早く回せ。そしてはやく私と順番を変えるんだ」

楓のお使いに付き合ってくれたはずのシグナムの声が、今はとても煩わしく感じられた。

声に急かされるように回転のスピードを速めようとすると、ちょうどその寸前に球がぼとりと落ちる音が聞こえた。

不意の出来事にヴィータは思わず目を閉じ、やがて真剣な表情でその球の色を確認した。

球の色は——赤。

自分にとつても馴染みのある色。その程度の感想だった。

突如、リンリンとベルの大袈裟な音が鳴り響く。

「でましたあっ!!2等賞の自転車です!!」

ベルを鳴らしていたのは、大の前に立つ係員のおじさんだった。その大袈裟な声と音に注意を引き、周囲の見物人もヴィータたちを見てはおおと声を上げる。

「ジテンシヤ……? なんかよく分かんねえけど、5等のビーフジャーキーにしてくれよ。ザフィーラが喜ぶ」

「おめでとうございまっ……ええっ!?! 自転車は?」

「いらねーです。じゃあ貰ってくぞ」

ビーフジャーキーを持っていこうとするヴィータ。仮にそれを持ち帰っても得られるのはザフィーラの微妙な表情だけなのだが、それでも彼女にとつては自転車よりは興味を引かれるものだった。

「まあ待て、そう邪険にするなヴィータ。自転車……風の噂には聞いたことがあるが、こう見えてかなりの性能を持った機体らしいぞ」

そんなヴィータを制止したのは、いつの間にか自分もくじを回し、ポケットティッシュを手に入れていたシグナムだった。ヴィータからビーフジャーキーを取り上げ、それと交換に自転車をおじさんから受け取る。

「んだよ？ 自転車って、たまに町で見かけるアレだろ？ あんま早くねーし、疲れるし、いらねーだろ」

「ああ、確かに疲れるし大して早くもない。もつともそれは魔法が使えればの話だ。今の我々が平然と魔法を使うわけにはいかないのはお前も分かっているだろう？」

「そりゃ……まあ。はやて達に迷惑かけたくねーし……」

「ならば貰っておけ。徒歩よりはよほど速いし、これからなにかと出番もあるだろう。それにお前が自転車を持ち帰ったとなれば、主もきつと喜ばれる」

「……まあ、シグナムがそこまで言うなら貰っとくかな」

「ああ、それに自転車をバカにしてはいけない。なんでも、かつてはこれに乗って宇宙人と月を背景に飛んだ少年もいたとか」

「まじで!?! 自転車すげえ!!」

先程までとは打って変わって自転車の興味津々といった様子のヴィータは楽しげな

声をあげながら、自転車のサドルやペダル、そしてハンドルを、まるでその存在を確かめるように触れた。

「てか、これどうやって使うんだ？ シグナムは知ってるのかよ？」

「まあな。どれ、少し貸してみろ。——うむ、これは中々どうして……」

重さゆえのふらつきと、少々の覚束無さこそあるものの、シグナムは自転車をほぼ問題なく乗りこなしていた。

もちろん、シグナム自身、自転車に乗るのは初めての経験だったが、彼女の持ち前の運動神経と、剣の鍛練を行う上で鍛えられたバランス感覚がそれを可能にしていた。

「おおー、やるじゃねえかシグナムー！」

素人目に見ても初めてとは思えない姿に、ヴィータも思わず称賛の声をあげる。シグナムもまた、柔和な笑みを浮かべながら片手を上げてそれに応え、自転車の軌道を修正した。

そして、そのままシグナムの姿は遠ざかり、燦々と煌めく太陽を背景に彼女は駆けた

「つて、そのまま帰るのかよ!？」

「あたしを置いて行くなァッ!!」

「ただいまー！」

「ただいま戻りました」

「お帰りヴィータちゃん、シグナム。お使いありが、と……」

夕飯の下ごしらえをしていると、なぜか頭に特大のタンコブを作っているシグナムと、前カゴに買い物袋を乗せた自転車を押したヴィータちゃんがちょうど帰ってきていた。

……自転車？

「……おつりで好きなもの買っておいでとは言ったけど、お兄さん、これはちよつと予想外かな……」

「おーい！ 楓ー！ これもらったー!!」

「うん、よかつたねヴィータちゃん。」

で、どつから拾ってきたのシグナム？ こういうはちゃんとお巡りさんに届けなきやダメだよ？」

「自転車で乗っているのはヴィータなのに、なぜ真つ先に私を疑われるのか……遺憾の

Eです……」

「ごめんごめん。さすがに冗談だって。で、それどうしたの？」

「ええ、実は——」

かくかくしかじか、かゆかゆうまうまと2人からある程度かいつまんで事情を聞く。

「なるほど、福引きかあ。俺ああいうの当たったこと無いからちよつと羨ましいかも。

もう乗ってみたの？」

「ご令弟。実はヴィータは挑戦はしたのです。したのですが……」

「楓、自転車はあぶねー……。さすがは宇宙人が作った超小型空中飛行挺ってだけはあ
る」

……ちよつと何を言ってるのかは分からないけど、とりあえず自転車に乗れなかった
のは分かった。

確かによく見てみれば、ヴィータちゃんの服には転んだような汚れがいくつかあつ
た。

「まあ、自転車って最初は難しいって言うしね。仕方ないよ。なんだったら近くの公園
に練習できる場所があるから行ってきたらどうかかな？」

「よし！ ならば私とそこで特訓だ！ 着いてこいヴィータッ！」

「イヤだ」

「そうかつ！ なら私一人で行く!!」

「シグナム一人で行っても意味ないでしょ!? ヴィータちゃんもなに笑顔で拒否つてんのー!」

「ハツ!? ご、ごめん、楓! つい反射神経で」

反射神経で拒否るってどんだけシグナムとの練習イヤなんだ……。

その後、俺も協力するという条件でヴィータちゃんを納得させ、俺たちは公園にやってきたのだが……結果は、まあ惨々たる様だった。

決してヴィータちゃんの運動神経は悪くないけど、こればかりは相性というか……それはもうこの1時間で一生分は転んだのじゃないかというくらいにポンポンと転んでいた。

「ヴィータ! そこで左足を踏み込むんだ! ああ違う遅い! 足が完全に落ちる前に反対の足を踏み出すんだ! 水上を走ると同じ要領だ!」

「うるせえ! 人が水の上を走れるのを前提で話すじゃねーよ!! 忍者かテメーは!!」

転びながらも律儀に突っ込みを入れるヴィータちゃんのプロ根性の何たることか。

「ふくむ、どうにも上手いかな……どうしたものか」

「いてて……別にそこまで本気でやらなくてもいいーだろ。自転車くらい乗れなくても困

らないし……」

「そんなことでどうするッ！ この愚か者がッ！」

「わっ！ 急にでかい声出すなよ！ びっくりすんだろーが!!」

「ええい、うるさい！ そもそもお前には本気で自転車に乗ろうとする覚悟が足りんだ！ 必死になれていない!!」

「いや、別にそんな自転車くらいで……」

「……いいか、ヴィータ。お前の不安を煽らないように黙っていたが……件の少年と自転車に乗った宇宙人の話を覚えているか？」

「……？ お、おお……」

「実は彼はな……自転車に乗れない子供は用無しとして、代わりにその家族を自分の星へと誘拐してしまうんだ。一度連れ去られたが最後、もう二度と遭うことも叶わず、ひたすら自転車を漕がされる毎日が待っているそうだ……言っている意味は分かるな？」

「ま、まじかよ……つまり、楓やはやてが……。わ、分かった！ あたしはやるぞシグナム！ 指導頼む!!」

「よしッ！ じゃあとりあえず覚悟の証として、次にこけたらシャマルと二人で風呂に入ってもらおう！ そうなれば五体無事で済むと思うなよ!!」

「死んでも乗りこなすッ！」

最低か。

やっぱり仲間内でもそういう扱いなのかシヤマル……。

「楓っ！ あたし、楓を宇宙人に連れて行かせたりしないからな!!」

えっ、俺拐われるの？

この子はこの子でさつきから自転車を一体なにと勘違いしてるんだ……。

その後もシグナムによるヴィータちゃんのスパルタ訓練は続いたものの、覚悟を決めたからといって急に上手く行くなんて漫画みたいな話があるはずも無く、ヴィータちゃんは相変わらず自転車を乗りこなすことができないでいた。

そんな中、騒ぎを聞いたシヤマルが家から応援に来てくれていた。

「どう？ シヤマルから見ても何かアドバイスとかないかな？」

「うくん、そうですねえ……ヴィータちゃんはちよつと力が入りすぎている所がありますね。もうちよつとリラックスして挑戦してみたらどうかしら？」

「わ、分かった。リラックス、リラックス……!」

「それじゃあ余計に力が入ってるわよ……。分かったわ。それじゃあ気晴らしにちよつとしたクイズでもしましょうか」

なるほど、まずは技術的なことは置いておいて、ヴィータちゃんの緊張をほぐす作戦か。それは確かに効果がありそうだ。

「プリンスプリンス、スパイススパイス。『ス』を抜いて言ってみると?」
「プリンプ——死ねツ!!」

シヤマルの最低な問題の意図に気付いたヴィータちゃんが、巨大なハンマーでシヤマルに正義の鉄槌を下す。家に来て初めてアイゼン使っちゃたよこの子。本気で殺しに掛かってんじゃないか。というか今のは死んだんじゃないか?

「おふ……たとえこれで死んでも後悔はないわ。……ああ、ただ瞳を閉じれば、あの日の思い出がよみがえったり、貴方の姿が映し出されて……」

「そのまま滅びろ!」

「そういえばお菓子のホワイトロリータって食べてると変な気持ちになりませんか?」

「……ホント、いい病院紹介しようか? いろいろな意味で」

その後、シヤマルがヴィータちゃんによつて埋められたため事態は結局振り出しに。この人本当に何しに来たんだろ。

「んー……。やつぱさ、こういうのは運動できる人に聞くのがいいんじゃないの?」

「私がいるじゃないか」

「テメエは一生アメンボごっこやってろ。楓は誰か知らないかな?」

「運動神経のいい人か……まあ、当てが無いことは無い……けど」

携帯を電話帳を開き、『た行』をタッチするとディスプレイに表示される一つの番号。

着信拒否しようが登録を消そうが問答無用で毎晩掛かってくるその番号——の下に表示されているメールアドレスを開いた。だって直接声聞くの怖いんだもん。

「メールの内容は……来て、と」

「え、そんだけ？ それで大丈夫なのかよ？ つーか、そんないきなり呼んで来てくれんの？」

「はは、やだなあヴィータちゃん。月村さんならメールすれば1分で来るに決まってるじゃないか」

「そ、そうなのか……。そういうもんなのか……」

「そもそも今のメールだって『遊びに来て』ってていう意味じゃなくて『出て来て』って意味だし。」

「おまたせー!」

「こんにちは、月村さん。来てくれてありがとうね」

「まじで来た……!」

メールを送ってきっかり1分。案の定月村さんはそこにいた。

ヴィータちゃんがその事実には軽く戦慄しているが、八神家の一員である以上、この程度のことで一々驚いていたら身が持たないよ？

「今日は楓くんから電話が来るような気がして、おはようからお休みまでずつと見守る

ことにしてたんだ！ これって運命かな!？」

「楓」。この人ちよつとキモーい」

俺はヴィータちゃんはその表現が本当は有り得ないくらいソフトな方なんだと気づく日が来ないことを祈るよ。あと多分それは運命じゃなくて呪い。

「それで、自転車に乗れなくても困ってるんだったよね?」

「うん、相変わらずドン引きするぐらい話が早くて助かるよ。あえて聞くけど、何で知ってるの? いつからいたの? あと月村さんは運動得意だし、その辺なにかアドバイスとかないかな?」

「私は楓くんのことなら何でも知ってるよ! ……うくん。私も自転車自体は乗れるんだけどね、結構感覚で乗ってるところがあるから……。あ、そうだ!」

「なにか思い付いたの!？」

やはり運動神経と成績と変態性は学年トップの月村さん。もう何か良い案を思いついたのか。流星はジャイアン並の力とスネオ並の財力と出来杉くん並のスペックとせずかちゃん並の容姿とドラえもん並の並の利便性とのび太並の残念さを持つ月村さんだ、頼りになる。

「つ、月村師匠! あたしはどうすればいい!？」

「うん、補助輪……つけてみたらどうかな?」

……あ。

「お、おお……すげえ！ 自転車すげーよ楓！」

月村さんのアドバイスのおかげで、補助輪付きとはいえ、やっと自転車に乗れた
ヴィータちゃんの声はとても嬉しそうだった。

もともと、ヴィータちゃん自身の運動神経は悪くないし、あの分ならすぐに補助輪は
取れるようになるだろう。

「ほらー！ 楓も乗ってみて！」

喜びを誰かと分かち合いたいのか、ヴィータちゃんは俺の前で自転車を降りて、興奮
しながらサドルを指差した。ああ、やっぱこの子天使だわ。

もちろん天使の静かな湖に波紋が広がって行くような笑顔を曇らせるわけには行か
ないので、俺はその申し出を快く受け入れて自転車に乗り——そして思いっきりこけ
た。

「補助輪つきで……」

「こけた……!?!」

……ここまで自分の運動神経が悪いと自覚していなかった初夏のある日。

恥ずかしさと傷みに悶えながらも、これから起ころうであろうシグナムの猛特訓に思いを馳せながら……静かに意識を手放した――

別に魔法ぶっ放さなくても、友達にはなれる

「思うんだけどさ、人間って言うのは元々孤独な生き物だと思うんだ。誰も頼らない、誰も助けない」

ーパチン

「はい、ピンクとブラックとった。次シャマルの番な」

「でもさ、そんな人間にも一つだけ例外はあると思うんだ。つまり何が言いたいかって言うよね……」

ーパチン

「やったわ！ ブラックとレッドとホワイトをトリプルゲットよ！ 次はやてちゃんどうぞ」

「……友達ってさ、いいもんだよね。困った時に助け合えるってさ、素晴らしいと思わない？」

ーパチン

「あつ、私もブラックゲットや！」

はい、シグナム」

「ああ、いや……本当はそんな話がしたいんじゃないんだ。もつと分かりやすく言うところ……」

ーパチン

「私もブラックゲットです。これでご令弟は脱落ですね」

「……みんなで俺を集中攻撃するのをやめてください……。俺に仲間はいないんですか……？」

はい、そんなわけでいきなり敗北宣言を食らっています。ちなみに俺達が今何をしているのかというと、八神家五人用特別オセロ、通称ゴセロ。

通常の白と黒の駒に加えて、赤、ピンク、グリーンが追加された姉さんの悪ふざけによる産物だ。相変わらず変なことばかり思い付きやがって。

しかもこのゲーム、数の暴力によるイジメが可能なだけじゃなく、もう一つ恐ろしいことがある。

「それじゃあ最下位の楓は罰ゲーム決定や！ みんな〜」

「はいはい！ 全裸でシヨタコンレポリユーションを踊ってもらいましょう！

あつ、もちろん私も一緒に踊ります」

「いやいや、バカを言うな馬鹿。ご令弟にそんな恥知らずな真似をさせられるか馬鹿。

私とかめ〇め波の練習をしていただくに決まっているだろう馬鹿」

「私はシグナムの恥の定義が気になるわあ。ヴィータは何がええと思うー？」

……そう、最下位に他の全員がよってたかつてたかつて罰ゲームを与えるのだ。ザフィーラ、どうやら盾の守護獣の出番のようですよ。

「ジュース……」

「ん？」

なにやら覚悟を決めたような声をヴィータちゃんが搾り出す。

「……あたしは、ジュースが飲みたい！ 飲みたいったら飲みたい!!」

「お、おいヴィータ。ジュースくらい別に今度でもいいだろう？」

「あたしは今飲みたいんだよ！ だから楓、買ってきて!! 早くッ!!」

……今、もしかしたらみんなの目にはヴィータちゃんは我が儘な子供に写っているのかも知れない。

みんなで決めるはずの罰ゲームを、痲癩を起こして勝手に決めただからそう見えても不思議じゃないだろう。

だが俺は見た。

ヴィータちゃんの口が確か『に・げ・て』の形に動いたのを。

ありがとうヴィータちゃん。

最高だよヴィータちゃん。

君がご近所で天使だの癒しだの魔窟にさす一筋の光だのと言われてる理由がハッキリ分かったよ。

さてさて、ヴィータちゃんの助けもあつて逃げて来たのはいいけど、これからどうしようか。家にはしばらく戻れないし、金もないし、友達もないし。

公園にでも行くか……。……。……。……。……。あそこにいるのは

「あつ、君はあの時のフェレット落としの人」

「そう言う君はビー玉集めの子」

……。いや、フェレット落としの人は無いんじゃないか。そんな渾名つけられてみる、温厚なムリゴロウさんが修羅と化してやって来るぞ。

「……。つて、ああ、そういえば前は結局名前も聞くの忘れてたんだっけ。えつと、俺は八神楓。君は？」

「あ、えつと、フェ、フェイト……。フェイト・テストロッサ」

「フェイト・テストロッサ……。なんかっこいいね。よろしくテストロッサさん」

「あつ……。よ、よろしく……」

ビー玉の子改め、テスタロッサさんと握手を交わす。

「それにしてもこんなところで会うなんて奇遇だね。テスタロッサさんは何してたの？」

「……テスタロッサ、さん……。あつ！ わ、私はジュエルシードを探してたんだ」

「あー、やつぱりまだ全部は見つかってないんだ。俺も気にしてはいたんだけど……。ごめん、あれ以降は見えてないや」

「そ、そんなこと！ 協力してもらってるのは私だから!!」

「ーあれ、この子もしかしてすっごい良い子じゃねえ？」

普段からヴォルケンの相手をしていると、こういう穢れの無さすぎる反応をされると、なんかというか戸惑う。これがシグナムならインド映画みたいに唐突に踊り狂いながらジュエルシード探しの手伝いを要求してくるのに。

「あ、そうだよ。今日はしばらく家に戻れないんだし、俺も探すの手伝うよ!」

「えっ!? い、いいよそんなの! どこにあるのかも分からないし……」

「いいからいいから、俺にも手伝わせてよ! その……困ってる時に助け合えるのって、友達っぽいしさ」

よし。多分俺、今いいこと言った。

……と思ったら、テスタロッサさんは何故か困ったような表情でこっちを見ていた。
あ、あれえ？

「……もしかして、迷惑だったかな？ テスタロッサさん」

「あつ、いや、そんなこと……あの……で、できればその……あの、でも、やっぱり……
な、名前が……！」

名前がどうしたって？

「名前で、呼んでほしい……かな、なんて……そっちの方が友達っぽいし」

そんなこんなで二人でジュエルシード探しを始めて早くも三時間が経過していた。

フェイトちゃんと雑談を交えつつも町中をくまなく探してはいたけど、やっぱりそう簡単に見つかるわけも無く、結局一つも見つけることはできないでいた。

「それで、その後の調子はどんな感じ？ ビー玉集めは上手くいってる？」

「あんまり上手く行ってない……かな」

「そうなの？」

「うん……。そのせいで母さんを困らせちゃったし……。それに、フェレットには煽り顔

で

『相ツ変わらず無駄な抵抗をするんだねキミい……もつと賢く時間を使ったらどうだい？ ホモビデオ見るとかさあ!!』って苛められるし……」

ジワア……。

あ、ヤバイ、フェイトちゃん泣きそうだ。思い出して辛くなっちゃったのか。もう涙腺決壊三秒前って感じだ。大丈夫だよフェイトちゃん、多分俺でも泣くから。

「うん……。でも、仕方のないことなんだ。私がジュエルシールドも碌に見つけられないだめな子だから……。フェレットには虐められるし、母さんには叱られるし、あの子にはポコポコにされるし……。どうせ私なんて……」

なんかこの子ちょっと会わない内に大分ネガティブ入ってない？

「そ、そうだ。そのビー玉ってそもそも何なの？ 確かお母さんが集めてるんだよね？」

「あ、うん。これはジュエルシールドって言って、これに強く願えば願いを叶えてくれる口ストロギア……。えつと、つまりオーパーツみたいなものなんだ」

よし、話題逸らし成功。

それにしてもあれか。7個集めると龍が出て来てってやつか。へえー、思ってたより青くて小さいんだなあ。

「い、意外と驚かないんだね。信じてもらえないかと思った」

「願いを叶えるオーパーツ如きで？」

「ははっ、うちには既にネジが5、6本は外れてるとしか思えない本の妖怪たちがいるのよ？」

「君は君で辛い人生を送ってるんだね……」

その本気で哀れむような目を止めてくれないか。俺だつて分かつてる、分かつてるんだ。

「それにしても、願いを叶えるね……」

ということとは、あのビー玉を使えば姉さんの足を治せたりするのかな？

いや、上手くいけばおまけでシグナムとシャマルの頭も治せるんじゃないか？ あ

れ、ビー玉すごくね？

「とは言っても大抵は暴走して、おかしな結果になるんだけどね。だから楓も、もし見つけてもお願いいしちや駄目だよ？」

やっぱり世界がそんなに優しくできてるはずがなかった。俺の人生ハードモード確定。

……ん？ あそこの猫、なにかくわえてる？ なんか光ってるけど、あれってまさか

……

「にやー、にやー。……はあ、なんで私がこんな……完全に労基違反だろ……あつ、ヤバ。にやー、にやー」

なんか今聞こえてはいけない何かがある気がしたんだけど……。中間管理職の愚痴みたいなの……

「つて！ あつた！ あつたよ！！ フェイトちゃん！！」

「うそ、本当に……。あつ！ 触っちゃダメだよ！ 暴走する前に封印するから！」

こういう経緯で猫が愚痴つてたのか果てしなく疑問が尽きないところだけど、なんにせよラッキーだ。

フェイトちゃんが極めて慎重な手つきで猫が落としていったビー玉を封印する。なんか鎌みたいなのがあるから出てきたけど、最近の魔法の杖ってやたらアクロバティックなデザインになってるんだな。

「やっぱり暴走するとヤバイものなの？」

「軽くこの町が壊滅するくらいには」

予想以上に物騒だった。

俺、前にそれを投げて遊んでたんですけど……。

「でもみんな、なんでそんな危ないもの欲がるんだろうね？ 俺だったら頼まれても

要らないよ」

んでクビになった話でもしようか。

「ぶっぶおっ!! おふえっ、おへっ!!」

あ、笑ってくれた。始めてみる笑顔がむせながら吹き出す姿つてのもちよつと複雑だ
けど。

「こ、個人的なお姉さんなんだね。でもそんなこと言ったら相手の人も傷付くかもしれないし、止めておいた方がいいと思うよ……?」

すげー。見渡せば変態ばかりのこんな世の中だけど、フエイトちゃんは常識人でした。そう、これが人のあるべき姿なんだ。笑顔で容赦なく常識を粉碎する同居人なんておらんかったんや。

「まあ実際のところ、かなり助けられてはいるんだけどね。なんだかんだで面白い人達だし。それに実はうち、姉さんが病氣してるんだけど、最近はみんなが付いてくれるから学校にいる間も安心できるんだ」

「……お姉さんのこと、大切なんだね」

「うん、たった一人の肉親なんだ。命をあげたつていい」

せつかくだし携帯を取り出して写真でも見せてみようか。双子とは言っていないからビックリするかも。

……着信、38件……。メール62通……。

「あつ、死んだわ俺」

「えつ、死ぬの？」

とりあえずメールを古い物から順に開封してみる。

『遅いけど大丈夫？ 今どこにいるん？』

『帰りが遅いので心配してます。どこなん？』

『今どこ？』

『今シグナムが罰ゲームで鼻からレヴァンティン出してます』

なにそれすつごい見たい。

その後、見付けたジュエルシードはフェイトちゃんに渡し、急いで家に帰ったものの家に着くころにはすつかり真っ暗になっていた。

あ、玄関の電気、消えてる……もう寝たのかな？

もしかして俺、助かるパターン？

「……おかえり、楓。随分と、遅い帰りやったな」

お父さん、お母さん、多分僕は今夜そっちへ逝きます。

「た、ただいま姉さん……」

「楓！ ちょっとそこに座り！」

そのあとめちやくちや怒られた。

結論、夜遊びはいくくない。

それは珍妙な出会いなの

『今日は、みんななんやかんや騒いでいて、あとなんか授業頑張っていました。学校楽しいです。終わり』

「……いや、さすがにこれじゃ駄目か……」

突然ですが、俺は今とても困っています。というのも、実は俺は今日は日直なのです。日直の仕事は主に休み時間ごとの黒板の掃除や、プリントをみんなに配ることなど、簡単なものばかりですが、俺にはどうにも苦手な仕事の一つだけあるのです。

「学級日誌……どうやって書けばいいんだこれ……」

いくら唸っても、目の前の用紙は白紙のまま。俺はこの放課後に残って日誌を書く仕事だけは入学以来、どうにも苦手だった。

しかも、一人で唸っているうちにクラスメイトはとづくにみんな帰って、教室には俺一人……。なんで一人でいる教室ってこんなに寂しさを感じるんだろうね。

「……こうなったら、あんまり良い事じゃないかもしれないけど……みんなのを読んで参考にさせてもらおう」

ということ、ちよいちよいとページを捲る。うわ、この人すごい字がキレイなんだ

けど。誰だ？

『○月□日

今日はテストの成績表が帰ってきました。英語はすずかに負けちゃったけど、理数科目は学年で1位をとりました。このまま勉強を頑張つて、将来はパパの「あーくりあくたあ」とかいうものを作る仕事のお手伝いがしたいです。』

これはバニングスさんだな。

やつぱり普段は真面目というか、まさに日誌のお手本って感じだ。というか俺もその仕事のお手伝いがしたいです。

『○月☆日

今日は雨。そのせいで男子みんなでやるつもりだったドッチボールができなかったから雨嫌い。まじで雨とかありえねーよ。なんで神様はこんないらぬものを作ったのか意味ふめー。』

これは……隣の席の田辺くんか。なるほど……こんな風にラフな書き方をしてもいいんだな。

……ちなみに俺はそのドッチボールに誘われていない。少し泣きそうになった。

『○月×日

今日は掃除当番で、教室を掃除していたら、山田くんがふざけてバケツを振り回して、

八神くんは水がかかってかわいそうでした。すずかちゃんが注意してくるっいつたので、私は八神くんをふいてあげてたら、つかれた目でこのくらい家にくらべたら平気って笑ってました。』

そういやあつたね、そんなこと。これは佐藤さんか。あの時はありがとう。そういや確かこの日は結局濡れたまま家に帰って、事情を聞いた姉さんやみんなも怒ってたっけ。

『〇月〇日

今日、山田が転校しました。』

「や、山田ア!?!」

そういや、最近見かけないなく程度に思ってたなら明らかに何かの陰謀に巻き込まれていらっしやる!?

もうやだよ……なんか怖いよこの学校……。……いや、考えるのはよそう。どうせ時間の無駄だもん。ほら、次次

『〇月@日

今日はとて天気がいい日で、洗濯物を干すなら今日かなあと思いながら学校へ来ました。みんな私と同じことを考えているのか、どこの家も洗濯物を干していました。そのあんまりにずらつと並んでいる光景がなんだか面白くて、つついその内の一つに手

を伸ばしてしまいました。

そんなわけで、パンツ盗んだのは私ですごめんなさい。』

むしろ月村さん以外に誰がいると言うのか。ホント、やめてよね、最近じゃ俺の下着を何故か月村さんの方が多く持つてると言う謎の事態になってきてるんだから。

窓の外から人の寝顔を見るのだって昔はロマンティックだったかもしれないけど、今じゃストーカーって立派な犯罪なんだよ？

『○月★日』

日曜日は家族みんなでピリ―隊長のブートキャンプをやりました。だんだん体が温まって、テンション上がってええええ!!! 思い出したら居ても立ってもいられないのでランニングしてきます!!』

おい、誰だこれ書いたの。ありなのかこれは？ もはや学校が一ミリたりとも関係ないんだけど。

そつと学級日誌を閉じる。これは危険だ。見れば見るほど俺の世界がおかしくなっていく。

と、まあこんな具合にアホなことばつかさやっていたら不意に後ろから声を掛けられた。

「あの……八神くん？」

「ん？ ……あれ、高町さん？ どうしたの？ もうみんな帰ったと思うけど……」

「八神くん、今日の日直だったよね？ 先生にね、これを渡してほしいんだけど……」

はい、と高町さんから長方形の封筒を手渡される。

「これって……休学届け？ 高町さん、学校休むの？」

「うん、ちよつとね。あつ！ でも本当にちよつとだけだよ！ 用事が終わったら直ぐ

に戻ってくるから！」

お、おう。

なんかよく分からないけど、随分と張りきってるみたい。とりあえずがんばる？

「うん！ ありがとう八神くん!!」

「きゅーきゅー」

「……とここでさ、さつきから気にはなってたんだけど……高町さんの肩にいるそれっ

てフェレット？」

正直、今はできるだけフェレットに関する話題は避けたかったけど、なんかさつきからこつちをガン見してるんだけどそいつ……。

「あ、うん。この子はユーノくんっていうんだ。ちよつと前から家で飼うことになったんだけど……お兄ちゃんがあんまり一緒に居たくないって言うから連れてきちゃった」

へえ、もしかして高町さんのお兄さんは動物が苦手なのか。そういやフェイトちゃん

もフェレット苦手だったっけ。いや、あれは相手のフェレットが特殊すぎるだけか。

「ま、いいや。よろしくね、ユーノくん」

「きゅー、きゅー」

「あ、鳴いてる。かわいいなあ。きゅー、きゅー、きゅー、きゅー？」

「日本語でおk」

「!？」

……い、今のは幻聴……？

「い、今このフェレット……！」

「き、ききききききのせいだよ！うん！ 絶対に気のせい！ 気のせいだったら気のせい

だよー！」

「木の精!? このフェレットは木の精なの!？」

「強いて言えば奇の性かな？ やあ、ホモーニング！」

「また喋った!?! しかもなんか気持ち悪い挨拶した!」

「こ……これはそのお……ふ、腹話術! そう、腹話術なんだ! 最近練習してるの!」

「『どーも、私、高町なのは。趣味はプロテイン自作と、町でいちやついてるカップルに

泥団子を投げつけることでゲスウ〜』」

「私はそんなこと言わないもん! ユーノくんのバカ! ……あつ」

まさかこいつ……

「いやー、それにしても君、男の子だよな？　よかつた。なのは友達ってエセツンデレとロマンティックストーリーくらいしかいらないものだと思つてたよ。なんだいるじゃないか、僕好みのシヨタボーイがさ！」

間違いない。こいつ、フェイトちゃんの言つてたフェレットだ……！

「もう！　ダメでしょユーノくん!!」

ユーノくんは変態さんだから八神くん驚いちゃつてるじゃない！」

「それはちよつと聞き捨てならないな。僕は変態なんかじゃない、ただ純粹に男の子が好きなのだ」

「どつちにしてもタチ悪いよ！」

頭が痛くなつてきた。

「高町さん、今つて夜だっけ……?」

「認めたくないのは分かるけどこれは夢でも幻でもないよ。歴とした現実なんだ」
ですよねー。ちくしょうが。

「あ、あの、八神くん、これはね……」

「あー……いや、いいよ説明しなくて。多分聞いても後悔するだけだと思うから。でも代わりににそいつにフェイトちゃんをあまり虐めないように言つてくれなさい？」

「えっ、フェイトちゃんを知ってるの!？」

「今まではやれ、脱いだ後の靴下だの、鼻をかんだ後ティッシュとカスどもにゴミ同然に扱われてきたけど……その不幸も全て、君に会うための試練だったんだね!」

おい、こいつさつきからなんかおかしいぞ。なんの脈絡もなく変な話題ぶっこんできやがった。

「ほらユーノくん! 八神くんが困ってるでしょ!! それに今は私がかえ……八神くんとお話してるんだから邪魔しないの!!」

「止めないでよなのは。言っておくけど、僕は女の顔なら躊躇いなくグーで殴ることもできるんだよ?」

「したり顔でなに言ってるの!？」

コラッ! ユーノくん、女の子には優しくしないとダメって言ってるでしょ!」

……なんだこれ?」

……なんだこれ?」

「あの……悪いけど俺もう行っていくかな? 帰ったらヴィータちゃんv i t aで遊ぶ約束してるんだ」

早くこの現実から離れてゲームの世界に逃げ込みたい。面白いよね、ゴッ○イーター。

「あ、もしかしてGOD EATER! 私も持つてるんだ! ねえ、今度通信しようよ!」

「ー臥せれてない!?

「ゲームう? やめときなよそんな子供騙し。君には似合わないよ。僕ともつと危ない遊びをやらないか?」

お前は黙つてろ靴下。

「ごめんね八神くん! ユーノくんはちゃんと近いうちに去勢しておくから!」

「え、なにそれ聞いてない」

「ほ、ホントに今日はごめんね、八神くん……」

「いや、いいよ……。なんかもう最近いろいろありすぎて、ちょうど人生に諦めがついてきたところだしー」

「ん? 今諦めるって言った?」

……え?

「まずい……!」

何故か一目散に逃走を始めるユーノ。そして高町さんはユーノの顔面を驚掴みにしてそれを食い止めていた。

……は?

「今諦めるのって言ったよね？　なんで？　なんでそこで諦めるの！　根気よくお話しすれば変態のユーノくんも分かってくれるかも知れないでしょ!?　諦めちゃ駄目！　諦めちゃ駄目！　一生懸命に頑張つてれば気付かない内にやり遂げられるから！　八神くんはまだエンジンのかけ方を知らないだけなんだよ！　私も一緒に頑張るから、八神くんも頑張つて！　具体的に何を？　知らないの!!　考えるんじやなくて感じるの!!　さあ、一緒に叫んで！　よっ……しやあああああツツ!!」

「……ねえ、ユーノ。これはなに……?」

「な、なのはに『諦める』は禁句なんだ！　昔の体験がどうちやらとか言う割とどーでもいい設定で、その言葉を聞くとなのはのテンションがフォルテツシモに……!」

「おい、ユーノ。　なんかこの子シャドーボクシング始めたんだけど……!」

「ついでに攻撃的になるんだよ!　この前なんてその言葉を言った金髪にスープレックスカまして泣かせたくらいなんだから!!」

なにそれ金髪の子かわいそう。

「な、なのは!　とりあえず一端落ちけつー!」

「リリカルトーキック!」

「ア、アアアア!!」

「ユーノ!?!」

高町さんは驚掴みにしていたユーノを地面に叩きつけると流れるような動作でつま先蹴りを叩き込んでいた。

なんて酷いことを……でも、ごめん、ちよつとスッキリした自分がいるわ。

「くそ！ 下手に出れば女の癖にいい気になりやがつて！ 僕にこんなことをしてみろ

！ 動物愛護団体とムリゴロウが黙ってないぞ!!」

「リリカルストーンピング！」

「ア、ア、アアアアアアアア!!」

「ユーノオオオ!!」

その後、高町さんの、お仕置き完了なの、という死刑執行完了宣言が出るまでユーノフルボッコは続いた。

俺はというと、もう完全にハートフルボッコされてその場に立ち尽くすことしかできませんでしたとき。

「ご、ごめんね二人とも。諦めるってワードを聞くとうとうしてもテンションが上がっ

ちゃって……。私のこと、めんどくさい子だと思おう……。う？」

「ま、まさかそんなあ。ねえ、楓？」

「そ、そうだよ！ そんなこと思うわけないじゃないかー……」

「ほんと!? 良かったあ……」

「(めんどくさいわこの人……」

……)」

『今日の日誌』

今日、ホモと修造に出会いました。

八神楓』

宿題は自分でやりましょう

「う〜ん……」

それは春の穏やかな気候も終わりを告げた、蒸し暑い夏の土曜日のことでした。

突然ですが、今、俺はある重大な課題を抱えています。それは……。

「作文の宿題つてなに書いたらいんだ……」

そう、全国の小学生の共通の敵、学校の宿題です。しかも、今日の宿題は自由作文。つまり、自分で何かテーマを決めて、それについての文章を書かなければならないのだ。正直、数ある宿題の中でも俺はこれが特に苦手だ。おのれ先生。

変に考えすぎてテーマすら決まらない……。日誌に続き、こういう文章書くのつてなんだか苦手なんだよな。そもそも俺理系だし。というか、そもそもなんでもいいつてのが悪いんだよ。晩のおかずのリクエストも宿題もなんでもいいが一番困るつて隣のバアが言つてた。

「こういう時は誰かに相談するのが一番なんだけど、友達いないしなあ、俺……」

「あ、楓くん、それ今日の宿題？ 困ってるなら私でよければ相談に乗るよ？」

「さも当然のごとくいつのまにか我が家にいたことはともかく、なにかいい案があるの

月村さん？」

「うん、ちよつと待つてね……」

我が家の座敷童、月村さんが手持ちのカバンから綺麗な字で書かれた作文用紙を手渡してくれます。しかも、軽く内容に目を通せば、これまた小学生らしからぬ高度な文章表現だった。しかしすごいよな月村さんって。だってこれだけの輝く才能を、カバンからはみ出てる男物のパンツ一枚で台無しにできるんだもん。誰にでもできることじゃないよ。

「私はお姉ちゃんやメイドのフェアリンやノエルのこと、それに近い未来の旦那様のことを書いたんだ。楓くんもご家族の人に協力してもらって、家族のこと書いてみるのはどうかな？」

家族かあ……。確かにいい案かもしれないけど、うちの家族だしなあ。どうせまた口クでもないこと書かされるに決まってる……。特に姉さんとかシヤマルとかシグナムとかシヤマルとか。

「……うん、悪いんだけどさ、月村さん、やつはこの宿題に関して自力でやろうと思うんだ。月村さんも、うちの家族にはこのこと、黙っててもらえるかな？」

「うん、わかった！ 楓くんがそう言うなら私、絶対に言わない！」

「今約束したからね？ 本当にお願いだよ。いい？ 俺の宿題の件は姉さんたちには、

絶対秘密！」

「楓くんが2年生までおねしよしていたことは、絶対秘密！」

「ちがう!! というかなぜ知っている!？」

とかなんとかコントをしていたら、騒ぎを聞いた自宅警備員達《ヴォルケンリッター》が何事かそこつちに集まってきていた。

「さつきから一体どうしたんですか? もしかして最近近所にできたおたのしみ幼稚園の話ですか? だったら私も仲間に入れてください!」

「ああ、そういうえばその幼稚園からシヤマル宛に接近禁止命令の手紙が来ていたぞ。わざわざシヤマルごときに様付で手紙を送ってくれるなんて実に礼儀のなつた先生だ」

「……あれ、楓それ何書いてるん? あつ、それ学校の宿題?」

あーあ、結局こうなつちまうんだよ今回も……。

「宿題ですか! だったら私たちもお手伝いしますよ。ねえ、シグナム?」

「うむ。ご令弟と主の力になつてこそそのヴォルケンリッターだ。宿題ごとき、目でもない。して、宿題とは何者なのですか、どう始末するのが効果的ですか、爆薬は何個必要になりますか? ご令弟」

慈愛に満ちた聖母のような表情で訪ねてくるシグナムに、今、俺の中の本能とか危険信号とか、なんかそれっぽいものが全力で警報を発していた。

曰く、このランボーと同じような思考回路を持った女に任せてはいけないと。

「いやー……みんなの気持ちは本当にありがたいんだけどさ。だからこそ気持ちだけ受け取っておきたいというか……」

「へー。自由作文の課題かー。最近はこういう宿題がでるんやねえ」

って、もう始めてる!?

「悩むことなんてないわ楓くん！ テーマを家族にすれば、こんなのに書き終われますよ！ 例えば家族の好きな食べ物とか、休日の過ごし方とか、趣味とか！」

「ただでさえ微妙に教室で浮いているこの俺に、家族の趣味はおたのしみ幼稚園をおたのしみこととすと書けと？」

「じゃあ僕、八神楓の将来の夢はシャマルお姉ちゃんのお婿さんになることですよって言うのはどうですかッ!!」

「あ、絶対ヤダ」

真顔で速攻で答える。

今の時代では大事だよ、はつきりとNOを言う意思。

とかなんとかやっていたら、いつのまにか姉さんが原稿用紙と鉛筆を手を取っていた。

「こういうのはわたしに任しとき。結構得意なんよ。あらほらさっさー……と、こんな

んでどないや?」

『テーマ お姉ちゃんについて。僕には、双子の姉がいます。僕は、お姉ちゃんが大好きです。どのくらい好きかというと、お姉ちゃんと僕の服を交換して、僕がお姉ちゃんになったような気分になりながら鏡を見て、いろいろなポーズをとることで快感が……』

「却————っ下ッ!!」

勢いよく姉さんの書いた原稿用紙を破り捨てる。

こんなもんを学校で発表したら友達どころか学校にいられなくなるわ。

「というか、俺は9年の人生の中でそんな回りくどい快感なんて感じたこともないからね!？」

「予感はできてたけど姉さんはいったい何がしたいの!？」 俺を一体どうしたいの!？」

「そんな事お姉ちゃんの口から言わすなんて……いやん、楓のエッチ☆」

「やめてくんないかなそういうこと言うの!？」 というかエッチなのは姉さんの頭の中だよ! ハア……時々何で姉さんが俺の姉さんなのかと本気で思うよ……」

「そっか……。ごめんな、楓……妻になつてあげられんで。今度みんな姉弟婚が許される国に行こう……?」

ポジティブだなあんた……。

「では、僭越ながら次は私が……ふむ、こんなものか?」

「あつちよ、勝手に……！ てか書き上げるの早いな!？」

シグナムが一瞬で書き上げた作文に目を通す。相変わらず無駄にスペック高いなヴォルケンリッター。この能力のリソースをなぜ一割でも頭に回さなかったのか。闇の書の製作者はきつとアホだったんだな。

『テーマ、近年の規制強化について。最近、子供向け番組で、過激なシーンやお色気のシーンが露骨に減っています。なんでも、子供にとつて害悪な存在は規制するのが正しいとかいうことですが、そのせいで、うちのシャマルがとても辛そうにしています』

「あれ？ シャマルって子供向け特撮とかアニメ好きだっけ?」

「いえ? 私はあくまで三次元のロリシヨタにしか興味ありませんよ。二次元ごとき規制されても屁でもありません。ちよつとシグナム。この作文間違ってるわよ」

「……? なにを言う。お前は存在そのものが子供にとつて害悪だろう?」

あ、そつちね。

クールな顔してしれつとひどいなシグナム。

「どつちにしても間違いよ! 私はただちよつとロリシヨタを眺めたり舐めまわしたり蔑んだゴミを見る目で見られたりするのが好き近所なエッチなお姉さんよ! ね、楓くん?」

「滅ベロリコン」

「そうです、それです。ありがとうございます！」

お礼言う前に謝れよ、全国の少年少女に。

「駄目だ、月村さん。やっぱりうちの家族は頼りにならない。というか頼りにしちやいけない。なにか他に案はないかな？」

『パンツが洗濯済みのものしかなかったので帰ります。　　すずか』

そういやすつかり忘れてたけど君もシヤマル側の人間だったね。

これ以降、もう宿題でこの人たちを頼るのはやめようと固く誓ったのでした。

あ、ちなみに俺の作文のテーマは若者の人間離れについてになりました。

映画は友達と見るようにしましょう

世の中何が起こるかわかったもんじやない。

言葉でいうのは簡単だけど、案外それを自分の身で考えることができる人は少ないものだ。

もしかしたら明日、事故にあうかもしれないし、地震が来るかもしれない。いや、それどころか古の魔導書が覚醒して4人の騎士が目の前に現れるかもしれない。

……と、考えていたけど、俺はまだ甘かったんだ。突然の出来事は『明日』じゃなくて、『今日』突然やってくるものなんだ。

実際今朝までの俺は今日、まさかこんなことになるなんて、夢にも思っていなかった。そう、今日バニングスさんに声をかけられるあの瞬間まで。

「あら、おはよう。今日は随分と早いじゃない」

「へ?」

思わず間抜けな声を出し、そのあとあたりを見回す。

……うん、誰もいないね。

え、もしかしてバニングスさんは今、俺に挨拶をしたのか?

いやいや、まさか。あの隙あれば俺を罵倒してくるバニングスさんが普通に挨拶するなんて。きつと今のは俺の心の弱さが生み出した幻聴だな!

「……聞こえなかったのかしら? あんたに言ったんだけど」

「ええっ!」

幻聴じゃない!? そんな馬鹿な!?

と、とにかく早く返事をしないと……。と言つても相手はあのバニングスさんだ。ここは努めて冷静に、かつ紳士的に余裕をもって返事をしないと。でないとまあた、ボツチは挨拶に慣れてないとかなんとか、なに言われるか分かったもんじゃないぞ。

なに、要はいつも姉さんとかにしてる挨拶をすればいいだけさ。俺ならできる。自分を信じて! さん、はいっ!

「お、おおおお、おはっ、おはよう、べ、バ、バニングスさん。そそ、そういうバニングスこそはやや、いね。クラスでいちっ、1番じゃん!」

よし、さりげなく返事をすることに大成功。どこからどう聞いても平静で落ち着きの

ある挨拶だ。

「そうね」

「あ、うん……」

「……………」

き、気まずい……。

なんでさわやかな朝からこんなヘビーな空気に……。

「映画っていいわよね」

「は？」

「テレビじゃ味わえないあの迫力。映画館特有の何とも言えない雰囲気。見ている人たちに心が一つになっていく連帯感。あれはまさしく人類の英知とも呼べる発明よ」

「そう……なのかな。映画はたまにしか見に行かないからよくわからないけど……。姉さんとは何回か行ったけど、最近はそれもずっとないし……友達と見に行くこともないし」

「相変わらず寂しい人間関係を築き上げてるのね」

ほつといてくれ。

「君〇名はって面白いそうよ」

「は……………」

今度はいつたいたいなんだ？　なんだか今日のバニングスさんはいつもに増して様子がおかしいぞ。

確かにその映画って……今いろいろな記録を塗り替えてるとかで連日連日ニュースで報道してるアニメ映画だっけ？

「流石のプロボッチのあんたでも、あの作品くらいは興味あるでしょ？　あれだけ話題になってるくらいなんだから」

「うーん、別に流行を否定するわけじゃないんだけど、あんまり人の評価は気にしないほうだしなあ。正直あんまり興味はないかな」

バニングスさんは信じられないものでも見るような表情で俺を苦々しく見ていた。

え、なんで俺こんな目で見られてるの？　そんなに目で見られるようなこと言った？　「……それはマズイわね。今時流行に疎いとか社会に出たら通用しないわよ、ていうか死ぬわよ」

「死ぬの!?!　映画見てなかっただけで!?!」

「私のパパ、洋画ばかり見ててろくに流行のものもチェックしてなかったんだけど、昨日いきなり爆発して帰らぬ人になったわ」

「爆発したのお父さん!?!　映画見てなかっただけで!?!」

ちよつとまって、今めつちや心臓バクバクしてる。

バニングス家はそんなしような理由で家長を失ったのか？ いつからこの国はそんなに世間のパパに厳しくなったんだ。

「そんなわけで、あんたどうせ明日も暇でしょ？ パパの二の舞になる前に行ってきたほうがいいわよ。ぼっちでも一つの命だもの。大事にしなさい」

まごうことなき暴言に、添え物レベルの善意乗せてぶん投げてきやがった——

つて、それよりこれは一大事です。正直バニングスさんの話をどこまで信じていいのかわかりませんが、魔法が実在するような世の中なのです。もしかしたら誰かが流行に乗り遅れた人間を始末する魔法を作り上げたのかもしれない。

ちよつと前は、死ぬときはランボーとかアベ〇ジャーズみたいな派手な爆発の中で絶対に散りたいなー、とか思ってたこともありましたが、この爆死はなんか想像してたのと違う！

映画……！ とにかく映画を早く見ないと……！

結局、その日一日の授業は全く頭に入りませんでした。

「さて、仕込みはこんなものかしら。あとは頑張りなさいよすずか」

「で、なんでこうなるのよ?」

「どうかした? バニングスさん」

翌日の土曜日、映画館に来ていた俺はバニングスさんと2人で映画の券売機の前に立っていた。

どうしてこんなことになったのかというと、今朝は珍しく月村さんの姿を見ないと思っていたら、彼女からインフルエンザに罹って、俺に移すわけにはいかないから、今日はパンツを取りに行けないというメールが来ていた。あと、映画館に行くならバニングスさんがいるはずだから声をかけてほしいとも。

なんで俺が映画行くこと知ってるんだとか今更な突っ込みは置いておいて、疑い半分で、映画館に行くとマジでバニングスさんがいた。とりあえず月村さんからのメールを見せると驚いた様子だった。

どうやらバニングスさんにも月村さんからのメールは来ていたみたいだけど、基本的なまじめなバニングスさんは映画館についた時点で電源を切っていたようで、メールに気付かなかつたらしい。

「私はさすがが見守ってほしいっていうから付き添いできただけなのに……『映画館

で偶然バツタリ、え、君も?』計画が台無しじゃない……」

「さつきからぶつぶつ言ってるけど、どうかしたの?」

「なんでもないわよ! そもそも全部あんたが原因なんだから!」

「えー!? なにそれ理不尽!」

普段からバニングスさんには雑に扱われてるけど、今日はなんだか特にひどいで。やっぱ俺、嫌われてるのかな……?」

「ねえ、この際だからはつきり聞きたいんだけどさ、バニングスさんは俺のこと嫌いなもの……?」

「え? 別にそんなことないわよ」

「じゃあ、もし俺と一緒に遊ぼうって誘ったらどうする?」

「時と場合にもよるけど多分断るわね」

「昼休みに一緒にお弁当食べようって言ったら?」

「そうねえ、断る……かしら?」

「……休み時間にちよつとした用事で話しかけてもいい?」

「そのぐらいなら……あ、ごめん、やっぱ断る」

「……落とした消しゴム拾ってって頼むのは……?」

「やあねえ、あんたの落とした消しゴム拾わさるくらいなら新しいの買ってあげるわ

よ」

「メチャメチャ嫌いじゃん!!」

はあ、とバニングスさんは呆れたようにため息をつきます。

え?　なんであんたがやれやれって顔してるの?　それ俺の役割じゃない?

「この程度で嫌われてると思うなんて、ぼっちの被害妄想力はすごいわね。あのね、あんた。こんな話を知っているかしら?」

「また突然に……で、なに?」

「その昔……ある男の子が事故にあつたとき、その子の持っていたゲーム機が壊れてしまったのよ。母親がその子を元気づけようとゲーム機を修理に出したの。すると、事情を聞いた会社は母親に修理費はいらなくて言つて無償で修理を行ったそうよ」

「へえー。それで?」

「いい話よね」

話しかかっただけ!?

「もういいよ!　とにかく俺はチケット買うから!　早くしないと爆発するし!」

「はあ?　何言つて……ああ、昨日のあれのことね。信じてたの?　特定の映画見ないだけで人が死ぬわけじゃないじゃない」

おい、待てや。

いや、おかしいとは思ってたけどさ。

「じゃあバニングスさんのお父さんが爆発したのは嘘だったんだね……」

「ええ、嘘よ。パパは今日も職場で平和にパワハラしてるわ。というか、流行の映画見な

いだけで爆発するんならあんたなんて今までの人生で5、6回は爆発してるわよ」

「やだよそんなダイハードの入門編みたいな人生……」

「とにかく、『君〇名は』なんて他人が見て回った手垢のついた映画見る必要はないのよ。なにか他の……ラッキーね、貞子vsプレデター2の座席が空いてるわ」

「そんなもん見に来てたの!?!」

なにその最悪な形での日米のコラボレーション!? お互いもつと他に出すものあつ

ただろ。しかも続編つくってんじゃねえ。

「ば、バニングスさん。俺、1見てないし、それはやめない……?」

「いいのよ、映画つてのは一作目で基盤を作つて二作目で面白くして三作目で潰すつて決まつてるんだから。ほら、ターミ〇ーターとか、エイ〇ア……」

「それ以上はダメえ!!」

長い説得の果て、結局『君〇名は』にしてもらえました。

というわけで、無事に座席についた俺とバニングスさん。

バニングスさんは映画館特有の大きな容器のポップコーンも買って準備万端です。

この映画が始まる前の何とも言えない期待感、俺は結構好きです。

「安くなつてたからついつい買っちゃったけど、一人で食べるにはさすがに量が多いわね。ほら、あんた」

はい、とバニングスさんがポップコーンをつまんで手を俺に口付近に差し出してくる。

え、これもしかしてあれ？ いや、そんなバカな……ハハッ、相手はあのバニングス

さんだぞ。

いやしかし……これはいわゆる、あーんというやつでは……？

「……ああ、あんたはぼっちだから経験ないかもしれないけど、これは別にポップコーン見せつけてかける新しいタイプの催眠術とかじゃなくて、食べ物が多くて食べきれないから分ける時に一般人が行う行動なのよ」

「知ってるよそのくらい！ ないけど！ 確かに経験ないけど！」

この人はいちいち皮肉は言わないと会話ができないのだろうか。

「まあ、その……ありがとう」

「いいわよ、そのくらい。ほら」

流石に直接食べさせてくれるほどサービスはなかったようで、弾くようにポップコーンを口に投げ込まれる。

あ、ポップコーンおいしい……。しかもなんたることか、食べ終わるとバニングスさんが次のポップコーンを差し出してきてくれた。

……なんだ、バニングスさん結構優しいじゃん。俺、バニングスさんのことちよつと見直したかも……。

「あ、そのくらいでいいよ？ あんまり食べると悪いし。ありがとうね、もうストップで。……ストップ。ちよまつ、ストップ！ もういいからッ！ ストオオツプ!!」

「あ、ごめん聞いてなかった」

この距離で!? 口ん中パッサパサになったわ。

「そういえば、バニングスさんはこの映画のこと詳しいの？ 俺はニュースの特番ちよつと見たくらいだからあんまり知らないんだけど」

「私もよく知らないけど、よく知らない田舎に住んでる女の子が、よく知らない原理でよく知らない相手とよく知らないうちに入れ替わる映画らしいわよ」

なるほど、よく分からん。

「あ、バニングスさん。さつきポップコーンと一緒にパンフレット買ってたよね？
ちよつとそれ見せてよ。ええと……どうやら黒髪の白い服の女の人が、ビームライフル
もって町で暗躍するアバンギャルドなデザインのクリーチャーと戦う映画みたいだね
！ つてこれ——」

貞子VSプレデター2じゃねえか！